

早稻田學報

大正七年 第貳百八拾一號 七月十日發行 每月一十日發行

本 號 目 次

意見
積極的方針に就て

大隈總長

校報

校規改定委員會——維持委員會——改定校規認可願出——科長會——研究科の設置——得業證書授與式——校外教育部消息——講師慰勞會——平沼理事の長野新瀉行——關西及九州地方視察旅行記——圖書館報告

校友會報

大隈總長祝壽紀念品贈呈資金寄附者芳名——三六會——四十一年哲學科出身者會——四政會——關西校友の總長祝壽紀念品贈呈——新瀉校友會——長野校友會——常盤地方校友の德永理事歡迎會——香川縣校友の宮田理事歡迎會——函館校友會——新嘉坡校友會——新嘉坡に於けるワレダニアン——校友動靜——校友會維持費贈出人

面影

教授……新歸朝……內藤多仲氏

學生會合

雄辯會——英語會——高等師範部大會——高等師範部第二部の横須賀見學——早稻田史學會——早建會——告工業政策科並に舊僚K組諸君——六機會——早稻田道の會——秋澆會——雞聲會——群馬縣人會——大阪同政會

運動

端艇部新艇進水式

雜報

新任支那留學生監督江庸氏の大隈總長訪問——江庸監督の來校——內ヶ崎理事の講演——田中教授の講演——北澤教授の講演——信夫講師の海外視察——鶴田舊講師の逝去——吉田東伍獎學資金義金應募芳名並に金額——故角谷啓三君の碑文成る

東京牛込

早稻田大學校友會

電話號碼三五〇〇番

東京九八八番口金

意見

積極的方針に就て

(講師慰勞會に於て)

總長 侯爵 大隈 重信

諸君、唯今平沼理事より御報告になつたとは切れくには私も承知致して居りますが實は昨年以來非常に憂慮して居つたのであるが、唯今の御報告に依て諸君と共に大いに満足する次第であります、畢竟茲に至つたのは諸君の御勵精及び此一時誤まれた感情の上に學校に何か過ちが存在して居るが如く誤解したことが遂に解くるに至つた故であると思ふのであります、學校の信用は公平なる調査の結果殊に基金管理委員、社會に聲望のある濫澤男爵森村男爵及び中野武警君其他著名の人々が熱心に調査されて、而して何等會計の上に通らなし、學校の内部に何等不規律の事なしと報告なされた、其報告は今平沼理事が報告された如く既に公けになつたのである、茲に學校に對する不信用學校に對する疑惑は釋然として解けたに相違ないのであります、併ながら凡そ感情の上に一度疑が起ると却々容易に解け難いものである、然るにも拘はらず昨年の多少の紛議は教授の上には餘りなかつたと思ふ、事務の上には起つたやうである、教授諸君は多少の紛議あるにも拘はらず自己の教場にして勉強して居つたのである、一時は子弟も父兄も疑つたのであるが、諸君が親切に講義を續けられたと云ふことによつて寄附者に於て

も學生に於ても父兄に於ても大いに安心をしたと思ふのである、其安心が即ち此學校の信用を立派に恢復するに至つたのである、然らば昨年の紛議に對して諸君の教授は學校の信用を恢復するに非常な力があつたものであると信するのである、一體學校には往々紛擾が起る、慶應義塾にも起つたことがある、官立學校にも時々起る、是れは學校の一つの病で、此病は日本特有のものであるか、世界にも此の如きものがあるか、是は疑問であるが、どうも私は餘り外にはないやうに思ふ、何だか日本特有のやうに思はれる、今でも尙ほ各地方の中學校其他の學校に續々斯う云ふことがある、高等商業學校なども非常な盛んな大紛議を起した、大阪邊にも市の學校などに紛議が起つたやうである、吾輩は早稲田に起つたのも世間一様のものであると言つて、責任を免かれやうとするのではない、吾輩は直接學校の仕事に關係しては居ないが、道徳上決して責任を免かれるとは出来ない、あの當時當局者に過ちがあつたか、私は過ちなしとは斷言せぬが、何だか煽動者があつたのではなからうかと云ふ噂もある、政治上に於ける紛擾、即ち群衆心理に訴へて煽動などをするやうなことが往々起る、是は日本ばかりではない、世界にもある、群衆心理が頭頂革命をも惹起す、夫れは理屈もあるか知らぬが大底の革命は何時でも群衆心理を利用して騒動を起す、政治上にも起るから學校にも起らぬとは言へぬが、併ながら政治と學校とは違ふ、政治は人の感情の上に働いて居るのである、國民の心理の上に働いて居るから或は革命もどうかすると起らぬとは言へぬが、學校にさ

う云ふ事のあるのを見出さぬ、全く性質が違ふ、さうすると此の如き淺薄な感情は何から起るか云ふと、封建の情力、又は支那思想に支配されて居る結果である、政治上にも其弊を受けて居るのである、之を名付けて事大の弊と曰ふ、事大の弊は實に困つたもので、是が爲に政府の學校などはどうかすると政府の或る目的の爲に支配されるに至つて、従つて學問の獨立を失つたのである、政府の目的からして外國の文明を模倣することが行はれて、獨逸主義亞米利加主義佛蘭西主義英國主義と云ふやうなものが起つて來た、各派の争が起るに至つた、もう學問の根柢がなくなつて居る、茲に此過てる思想を排斥する爲には教育は時の權力あらゆる權力から獨立しなければならぬ、思想も歐羅巴の思想を受けて過ちに陥るやうなことがあつてはならぬ、凡て政治も法律も歐羅巴と日本とは違ふのである、自然科學は總ての人類に通有の性質を有するものであるが、政治法律は其國の歴史なり其國の境遇に依つて多少の違ひがある、日本は決して英國にあらず、獨逸にあらず、日本は日本なり、其思想が混亂して遂に獨立を失つた、獨逸で斯う云ふことをやつて居るか日本でもしなければならぬと云ふと何等の獨立もない、獨逸に依つて支配されるやうなものだ、亞米利加に支配される、英國に支配される、皆獨立ではない、是れ吾人が學校の創立に盡力した小野梓君其他の人と相談して學問の獨立を宣言した所以である、學問の獨立は總ての思想の獨立である、人に依つて支配されぬと云ふことである、所がとかく外に制せられ易い、茲に一種の感情が起る、さう

して群衆心理に誤られて、社會に對して學校の信用を傷けるなどと云ふことが起る、是は實に遺憾なことである、併ながら今は過渡期で止むを得ぬ、一時はいろく困つた事もあつたが、學校の健全なる基礎は動搖しなかつた、否、直に恢復したのである、學校に破廉耻の行爲がある、財政が紊亂して居るとか寄附者の金を浪費して居るとか云ふ評が一時に立つた、之には天下は驚いたらうと思ふ、所が事實であつたかと云ふとさうでない、全く無根の事である、是皆講師諸君或は幹部にある所の經營者其他の人が獨立の精神を失つて居なかつた證據であると言つて宜い、健康の人も時には病氣に罹る、吾輩も昨年の秋大患に罹つた、併ながら元とく強い身體であるから一度病氣に胃されても直に之を擊退してしまつたのである、今や獨逸は聯合軍の一角を破つて巴里を取るとか取らぬとか、余程危険の状態になつてゐるが、結局は聯合軍の方で之を擊退しやうにある、聯合軍のアンゲロサクソンの力とラテンの力と之に亞米利加を加へた力は、獨逸の機械的に軍國的に組織した力と戦つて、遂には之を破るに相違ない、併ながら今の所は何だか獨逸が勝ちさうに見える、又事實勝ちつ、ある……夫れと同じこと、身體が強いと病氣が冒しても遂には之を擊退してしまふ、擊退したらどうなるか、學校で言ふならば、今度は攻撃的に今一層學校を大擴張をする、又時代が此學校の擴張を要求して居るのである、夫れには錢が要るから又寄付金を募集する、今日は何だか遠慮して寄付の募集を躊躇して居るやうだが、さう云ふことはいかぬ、もう進んでオツフェ

ンシヴに事をやる、ドン／＼金を取立てる、今や世の中は成金時代である、其成金が富の散じ方を誤まつて居る、其成金をして他日世の非難から免かれしめようとするには其金を國の爲に有益なることに使はしめることが必要である、夫れには今基礎を固めつ、ある所の學校へ資本を投じさせて置く、さうすれば富を得た者も之を保つことが出来る、そこで積極的に行ふ、何としても今の儘では治まらぬ、もう少し設備を完全にしないでいかぬ、殊に今平沼理事から報告された如く何か餘興が少し粗末であつたと云ふ、御馳走も粗末でありはせぬかと思はれる、併し之は尚ほ忍ぶ、亞米利加人や何か食を制限されるに比すると未だ餘程宜い、今や物價騰貴で、生活は非常な壓迫を受けて居る、此病氣は甚だ恐るべき病氣である、之を撃退しようとするには何としても一の法がなくてはならぬ、多分學校に於ては今平沼理事から報告された如く教授諸君の力與かつて大いなりと云ふ譯であるから之に對して御禮を増さなければならぬと云ふことは論を俟たぬ、どうかすると財政困難即ち不如意の爲に夫れもどうかつたか、物價騰貴の爲に餘興も十分張込むことが出来ぬと云ふ譯だから、私は能くは知らぬけれども、昨年来多少御禮を多くすると云ふ議論はあつたやうであるが、どうなつて居るかどうして金を使はなくてはいかぬ、使へば使ふ丈の甲斐はある、そこで國家將來の競争、共同生存の爲に、國家の獨立の爲には何としても其基く所は獨立せる思想でなければならぬ、殊に今日は學術の世の中である、學術競争の世である、之に資本を投じて

其發達を計ることは必要である、今度は一つ攻撃的に諸君と共にやつて見たらどうであらう、吾輩は昨年病氣を撃退した、前に増して強くなつた、百二十五歳も決して空想ではないと考へて居る、何で生命を保つて居るか云ふと、極く樂天的に積極的に行ふにオツフェンシヴに總ての物に觸れてやつて居るからである、抵抗力が強いから病氣も撃退する、是が吾輩の生命である、學校の生命もさう云ふやうに出来て居ると思ふ、吾輩が始め學校を立てる時に度々繰返して右の意味を言つたのである、茲に於て更に教授諸君に尙一層御依頼致して、此學校をして愈々盛んならしめたい、是に付ても積極的に行ふ、何處までも攻撃的にやりたいのである、どうかすると道學先生から非難を被ることがあるかも知らぬが、何でも構はぬ、ドン／＼競争する、進んで世界の大學とも競争すべきである、學校は決して商賣ではない、社會の信用に依つて成り立つ者である、富める者は金を出して宜い、是は國家の爲に寄付するのである、或る意味から言ふと決して税より苦しいものではない、もはや學校を疑つて居るものはないと思ふ、之れからは思切つて大活動をしなれば、學校が詰らないやうに思ふ、今の所では建物が足らず、豫料などは教授が出来ないと云ふ有様である、併し金さへあればどんな事でも出来るのである、今や教育の論が盛になつて居るが、教育が實際どう云ふことを盛んにして居るか、教育界の眞態を見ても何だか要領を得ぬことが多いと思ふ、學術の教授が目的であるならば、人間が總ての物に觸れて研究し且つ學理を應用して、研究的應用的

態度を以て努力しなければならぬ、所が茲に矛盾したことがあると云ふのは、一方には非常に道徳を説くことが盛んであるのに、他の一方に於ては科學の獎勵を云々して居る、何だか茲に矛盾が存して居るやうに思はれる、抑も今日の歐羅巴の戦争は何から起つたかと云ふと即ち物質的の誤まれる思想から遂に茲に至つたのである、而して辛苦經營して得た所の富を浪費して、人の生命を取つて尙木だ悟らずに居るのである、そんな亂暴なことを實地に演じて居ながら口に道徳論を囁々してると云ふのは矛盾ではないか、道徳其者は誠に單純なやうなものであるが、今日の道徳論が人間の心理上から觀て、眞に此時代に應じて居るか云ふと、どうかするとさうでない、宗教を以て人心を維持しようとしたことは諸君の御承知の通り二三世紀前に歐羅巴の政治家達か頻りに試みたのであるが皆失敗した、其爲に度々戦もした、どうも宗教を以て人心を統一することは不可能である、政治と結びつけることは更に不可能である、是は良心の自由があるからである、然るに今良心の自由を束縛しよう、斯う云ふ矛盾したことが切山／＼に現はれて居る、そこで道徳論と科學獎勵、之は矛盾して居る、思想は何か攪亂されて居る、是れ何等思想の獨立のない證據であると思ふ、そこで學問の獨立を以て立つて居るものが是から働くには積極的攻撃的に社會に模範を垂れて所謂時代に應ずる、社會的生存競争に應ずる科學が必要である、哲學文學固より必要である、道徳は文學の範圍に屬すべきものである、思想感情其の他人間の行爲を規則立てるものは道徳である、又高

等師範部又文學科では哲學歴史社會學を必らず教へて居ると思ふ、斯の如く種々専門は分れて居るが、概括して言ふと、總ての學生の志す所は早稻田大學の根本主義たる思想の獨立と云ふことでなければならぬ、然るに折角學校を出たものが社會に働くことが出来ないのが少くない、誠に詰らぬ話である、其證據は立派な大學を出て役人になつたものを御覽なさい、墮落して意氣地のないやうになるのが少くない、然るに學問の獨立を保ち人格を以て立つて居るものは之とは餘程違ふ、官僚より遙に道徳は高い、而して官僚社會が頻りに道徳を説いて居る、是が皆消極的防禦的で、危險思想を防禦するのだ、危險思想は防禦することはいかぬ、積極的の之を征服しなければならぬ、私は人心が萎靡して世が消極に陥りつ、あることを嘆ずるのである、道徳は或意味から言へば消極的であるやうであるが、決してさうでない、昔の道徳は消極的であるが、現在の道徳は皆積極的である、惡をなす勿れと云ふのではない、善をなせと云ふ、善をなす内に惡はなくなつてしまふ、さう云ふ譯だから其主義を以て一つ大活動をやらなければならぬ、吾輩老いたりとも諸君の後へに従つて、金を取立てる時には御手傳ひをやらたひ、併ながら兎も角一度疑ひを受けたのは學校に取つては面目ない次第であつたが、理事者及び教授諸君の熱誠なる御盡力に依つて此疑ひの解けたことを祝するのである、茲に諸君に向つて殊に理事者諸君に向つて深く感謝を致します、學校の繁榮發達を祝して茲に盃を挙げます。

校報

●第四回校規改定委員會 五日卅一日午前九時恩賜館に於いて第四回校規改定委員會を開く。

委員
 澁澤會長、中野武營、平沼淑郎、徳永重康、内ヶ崎作三郎、鹽澤昌貞、田中穂積、昆田文二郎、早速整爾、渡邊亨、増田義一、浦部襄夫、山田英太郎、上原鹿造、平田讓衛、松平康國、宮井安吉、永井一孝、中桐確太郎、寺尾元彦

●第五回校規改定委員會 六月十四日午後三時恩賜館に於いて開會。

委員
 澁澤會長、平沼淑郎、徳永重康、内ヶ崎作三郎、昆田文二郎、鹽澤昌貞、田中穂積、松平康國、永井一孝、中桐確太郎、宮井安吉、山田英太郎、渡邊亨、浦部襄夫、増田義一、上原鹿造

諸氏出席。校規改定案に就き審議討論、全部議了の上散會。

●維持員會 六月十八日午前九時恩賜館に於いて開會。

維持員
 澁澤男爵、森村男爵、松平伯爵、中野武營、大隈信常、三枝守富、昆田文二郎、平沼淑郎、徳永重康、内ヶ崎作三郎、宮田修、内藤久寬

諸氏出席。席上平沼理事より校規改定委員會に於いて議了せられたる校規改定案の提出あり。之れに就き討論審議の末之を議了確定

し、後ち、左の報告及議決ありて散會。

報告事項

- 一、水野正己(神戸校友會選出)、南方常楠(和歌山縣校友會選出)松村謙三(富山縣校友會選出)三氏に地方校友會選出評議員囑託の件
- 一、上井磯吉、伊藤康安、伊達保美三氏に講師囑託の件
- 一、四月四日高等豫科講師打合會を開きたる件
- 一、内藤留學生五月廿五日無事歸朝の件
- 一、六月廿三日講師慰勞會開催の件

決議事項

- 一、田尻稻次郎、北吟吉、工藤祐山三講師に退職手當を贈與する件
- 一、高貫菊松所有家屋を買収する件
- 一、長岡銀行東京支店を預金取扱銀行となす件
- 一、特待學生轉科するときは其の資格を失ふ可く次席者は縱今特待生の資格ありとも之を特待生とせざる件
- 一、校外卒業生にして専門部第二級に入らんとする者に對して學力考査試験を行ふ件

但大正八年以後は二年級編入を許さざる事

- 一、來九月より學費引上げを爲す件
- 一、高等豫科高等師範部第二學期編入試験料を引上げ本年九月より實施する件
- 一、専門部入學志望者に對し本年より學力考査試験を行ふ件
- 一、戸塚小學校新築費中へ寄附金を爲す件
- 一、有期維持員五月八日滿期となりたるに

付同月九日終身維持員會を開き全部重任の件

一、會計監督三枝守富、宮川鐵次郎兩氏任期滿了に付重任の件

以上

●臨時維持員會 六月廿九日午前九時恩賜館に於いて臨時維持員會を開く。

維持員
 澁澤男爵、中野武營、松平伯爵、大隈信常、宮川鐵次郎、三枝守富、平沼淑郎、徳永重康、内ヶ崎作三郎、宮田修

諸氏出席。左記事項の報告及議決ありて正午散會。

報告事項

- 一、本年度卒業生、講師職員及學生の現況
- 一、七月三日評議員會開催の件
- 一、七月五日卒業式舉行の件
- 一、基金及資金の狀況

決議事項

- 一、教授會規定改正の件
- 一、中島泰藏、横山有策、前橋孝義、中村萬吉各講師に教授會議員を囑託する事
- 一、評議員井上辰九郎外十五氏評議員任期滿了に付重ねて之を囑託する事
- 一、理工科助教授黒川兼三郎氏を本大學留學生と爲す件
- 一、三枝守富氏所有の土地及家屋買收の件
- 一、大正七年度收支假決算及大正八年度收支豫算の件

以上

●改定校規の認可願 別項維持員會に於いて議了確定せる改定校規に就き六月十九日東京府廳經由文部省に之が認可願出を爲したり

●科長會 五月三十日午後一時本部應接室に於いて開會。平沼、徳永、内ヶ崎、宮田各理事並に鹽澤、田中、淺野、中村、金子、中島、安部各科長出席。

學費の引上げ、未済試験の件、高等豫科高等師範部第二期編入試験料の引上げ、専門部二年編入廢止の事件、高等師範部第一部豫科を二學期と爲す事等に就き協議する所ありたり。

●研究科の設置 大學部文學科及高等師範部の研究科は來學年設置の豫定なり。故に右研究科へ入學志望の向は來八月三十一日迄に申出らるべし。

●得業證書授與式

七月五日午後三時本大學第三十五回得業證書授與式を舉行したり。詳細は次號に記載すべし。

●校外教育部消息

校外教育部本年度夏期講習會の六月廿五日迄に決定せる者左の如し。

▲東京(本大學講堂内)
 自八月二日至十一月十日間

世界の食糧戰
 早稻田大學教授、法學博士 平沼 淑郎

國法要義
 行政裁判所評定官、法學博士 清水 澄

極東の人類
 東京帝國大學理科大學講師 島居 龍藏

現歐洲戰の戰史的觀察
 陸軍參謀本部第二部第一課長、陸軍歩兵大佐 林 彌三吉

林 彌三吉

世界戦と我國の教育

早稲田大學教授、高等師範部長 中島半次郎
日本最近の實際的經濟政策

岡山縣下三和(淺口郡)

東京商業會議所書記長 服部文四郎
自七月二十七日至八月一日(六日間)

海外發展の地方

二 現代世界地理

三 歐洲大戰の歴史及地理

早稲田大學教授、農學士 志賀 重昂

新潟縣下小千谷(北魚沼郡)

八月二日、三日(二日間)

農村教育家の事業

早稲田大學教授、法學博士 平沼 淑郎

同縣下小出(北魚沼郡)

八月四日、五日(二日間)

農村教育家の事業

早稲田大學教授、法學博士 平沼 淑郎

福岡縣下北野(三井郡)

自八月 日至六日(五日間)

海外發展の地方

早稲田大學教授、農學士 志賀 重昂

秋田縣下小坂(鹿角郡)

自八月六日至十日(五日間)

軌近教育思潮

早稲田大學教授、高等師範部長 中島半次郎

福岡縣下大牟田(三池郡)

自八月七日至十一日(五日間)

講演題未定

早稲田大學教授、農學士 志賀 重昂

岩手縣下日詰(紫波郡)

自八月十日至十四日(五日間)

歐洲文明の淵源

早稲田大學教授、文學士 内ヶ崎作三郎

福井縣下鯖江(今立郡)

八月中旬(五日間)

講演題未定

早稲田大學教授、農學士 志賀 重昂

岡山縣下誕生寺(久米郡)

自八月二十五日至二十九日(五日間)

農村教育家の事業

早稲田大學教授、法學博士 平沼 淑郎

秋田縣下大館(北秋田郡)

八月下旬(五日間)

講演題未定

早稲田大學教授、農學士 志賀 重昂

大分縣下佐伯(南海部郡)

八月中

講演題未定

早稲田大學教授、法學博士 浮田 和民

講師慰勞會

六月二十三日午後四時麴町區内山下町帝國ホテルに於て開催。來會を待つ間の前餘興として、講談、筑前琵琶の演奏あり。饗て食堂開かれ、一同食卓に就き、談話の間に晚餐を共にし、デザートコースに入るや、……………

平沼代表理事

御挨拶を申し上げます、今日は御慰勞の微意を表しまする爲に御招待を申上げました所、多人數の御來會を辱げなう致しまして、主人側に於きましても洵に感謝の至りに堪へませぬ、殊に本學年は紛擾後の學年でありまして、それを無事に通過することを得るや如何であらうかと、實は心配を致しましたのであります、しかしながら諸君の格別なる御盡力に依りまして世間の信用も茲に回復を致し、また後ほど御報告致したいと考へまするが、基金の應募額の如きも例年に譲らざる

の有様を呈するに至つたのであります、是れ偏に教授諸君の御盡力の然らしむる所と考へまして深く感謝を致したいと思ふのであります。この機會を利用して本學年に於きまする經營の極く大體を簡単に御報告致したいと考へます、諸君の御盡力が効果を奏したものであると云ふことはこの報告に依つて明瞭になると信じます、私共は昨年詮衡委員諸君の御熱誠なる御報告に依り、再三御辭退は申上げましたに拘らず、遂に不肖を顧みずして幹部を組織するに至りました、實に短學不才の私共でありまして汗顔の至りに堪へざる次第であります、しかしながら一度その職に就きましたる以上は葛藤に纏つて責任を完う致したいと云ふことは晝夜忘るゝ能はざる所であり、第一に私どもが大いに心を勞しましたのは會計の状態であり、御承知の如く我が早稲田大學の會計が頗る紊亂をして居ると云ふ風評が屢々起つたのである、これ私どもの責任として第一に調査を致さんければならぬ所であると考へました、果して紊亂して居るのであれば、それに相當する所の處置を施さなければならぬし、紊亂の跡を認めずと云ふならばその趣を世間に發表するもまた私どもの義務なりと信じたのであります、故に第一着にこの調査に従事致しましたこの調査は大いに時日を要したのであります、その結果紊亂の跡なしと認めたのであります、また基金管理委員諸君の御會合をも乞ひまして、その内より特別に委員を選ん十分精細に調査を願つたのであります、その結果は學報紙上に概要を報告致して置きましたので定めて諸君も御一讀下されたことと存じますのであります、なほまた密附者諸君に對しましては別に印刷物を以て御報告致して置きました、それから又世間の信用の如何に依りましては或は入學の學生が減退すると云ふことがありはしまいかと云ふこと

も考へたのであります、これも深く憂慮したのであります、今年の成績を見ますると四月末日の調査に一萬〇三百六十九人と云ふ數になつて居ります、これを前學年に比較致しますと六百五十九名の増加になつてゐます、また基金の状態を概略御報告致しますと、紛擾以後私どもが幹部を組織致しましてから約一ヶ月間、殆んど應募基金の入金はなかつたのであります、唯、諸君の毎月の御袋の中より預金致しますものは、確實に入金致した、これ以外に入金の道は殆んど絶えて居つたと云ふ姿である、これに對して甚だ憂慮したのであります、しかし幸にして諸君の熱心に教授に従事して下さいました結果、漸次我が大學の信用も恢復致したと見えまして、十月頃より例の如く収入を得ることになつたのであります、第二期基金は申込總額が百二十一萬千と云ふことになつて居りますがこの五月迄に收受致しましたのが九十五萬千と云ふものになつてゐます、御大典紀念事業に就きましては申込額が六十三萬幾らでありまして、唯今までに收受致しましたのが四十三萬幾らと云ふものになつてゐます、御大典紀念事業資金の如きは十月以降今日まで現幹部の手に收受致しましたのが十九萬六千何ぼと云ふ額になつてゐます、その状況は決して例年に劣つてゐるものではないのであります、この儀も御安心の爲に御報告を申上げる次第であります、かくの如く世間の信用を回復致したと云ふことは我が大學の最も重要な地位に居らるる所の教授諸君の御盡力が然らしめたものと信する外はないと思ひます、誠に感謝致す次第であります。終に臨みましてなほ一言諸君に報告致して置きたいのは改定校規の件であります、これは大いに功程を怠いたのであります、或は今日御來會の諸君にこれを配付致すやうな運びになりたいと

實は切に希望してゐたのでありますが、今日に至るまで未だその運びに至り難しと云ふ有様であり、是は甚だ遺憾に存じますが、悪しからず御諒承を願ひたいのであります、御承知の如くこれを議定するために校規改定調査委員と云ふものが設けられまして、その後我々理事に於きまして二十有餘回の審議を重ね、續いて維持員會に於きまして十數回の會議を経たのであります、しつとも公然の會議は數回に止つておまきけれども打合せその他を合せますと十數回に上つてゐる、改定調査委員の手に移りましてから、これまた數回の審議を重ねられたのであります、この改定案が再び維持員會の手に移りまして、聊か修正を加へたのであります、その案は東京府廳の手に經て文部省へ出しましてさうして認可を得る、認可されてさうして後に維持員會で發表になる、斯う云ふ段取になつてゐる次第であります、承はる所に依りますると文部省の手に移りましたので二十日即ち昨日で、これが參事官會議に掛りまして、さうして認可の後東京府、豊多摩郡役所、戸塚町役場を經由致して學校の手に入るのであります、實に繁雜には困りますが、しかし行政上致方がないのであります、それでありまして豫期の如く今日の御會合に於いて、これを發表致すことの出来なかつたのは、遺憾な遺憾な次第であります、唯一言御話をして置きたいことは、今度の新校規に依りますと、従前と趣を異にしてゐますのであります、固より最後の總ての決定權は維持員會にあるのであります、しかし維持員會を組織するに當りまして従來は教授は何等關係はなかつたのであります、今度の新校規に於きましては教授よりして維持員會を出すべき機會を開いたのであります、經營と教務とは無論分つておまきけれども、これと同時に教授も又極機に參與するの機會を開いたのである、これが最も肝

要なる點であらうと信じます、これだけは今日御報告致して差支なからうと考へます、内容に至りましては遺憾ながらこれを發表するの自由を有たのであります、悪しからず御諒承を願ひたいと存じます。
以上極く大體に亘つておまきけれども、本學年間の概況を御報告致したのであります、重ねて一言致しますが、本學年に於きましての諸君の一方ならざる御盡力は實に感謝致します、然るに今日甚だ粗酒粗肴諸君の勞を偏ふに足らぬのは、甚だ遺憾とする所であり、またどなたか御話がありました、餘興も例年より少し粗末であると云ふことであつた、しかしこれも物價騰貴の爲めでありまして、物價騰貴を顧みずして大いに奮發すると云ふことは現幹部の責任上致しがたいことであると考へまして、物價相應に致した積りであり、思ひます、これまた悪しからず御諒承を願ひたいと思ひます、終に臨みまして杯を擧げて諸君の御健康を祝します。

との撈揆あり、次に總長大隈侯爵の演説、巻頭意見欄掲載あり。後ち一同乾杯校運を祝して食堂を閉ぢ、更に別室に於いて歡談の時を移し、やがて散會せり。當日の出席諸氏左の如し。(イロハ順)

- 大隈侯爵、磯ヶ谷幸次郎、井上克己、池田清、板倉松太郎、伊地知純正、市村讚次郎、五十嵐力、石原謙、畠山一清、原隨園、服部文四郎、馬場哲哉、早野七太郎、西松唯一、本田親二、本田信教、保科孝一、徳永康康、徳永庸、富田逸二郎、尾上八郎、小田内通敏、小穴秀一、岡田信一郎、岡田正美、岡村千曳、大屋敦、大森金五郎、大久保常正、大瀬甚太郎、大東直太郎、渡俊治、甲斐秀雄、神尾錠吉、神谷健夫、勝保銓吉

郎、金子馬治、片上伸、川原田政太郎、河合勇、川口潔、横山有策、吉田良三、吉田世民、吉田享二、吉田源次郎、高橋頑二、高谷實太郎、高桑駒吉、高杉瀧藏、立石謙輔、立川長宏、田中不二、田中喜一、田井善道、武信山太郎、武田豊四郎、伊達保美、民野雄平、坪内土行、坪内信、土屋啓造、土屋詮教、都築豊吉、内藤多仲、永井一孝、中野敏太郎、中西川徳、中桐確太郎、中島半次郎、中島泰藏、中村進午、中村萬吉、中村仲、中村芳雄、中島茂樹、内ヶ崎作三郎、馬田行啓、氏家謙曹、上井磯吉、内丸最一郎、植野包吉、宇都宮鼎、野村堅、野口尙一、昇直隆、黒川兼三郎、桑木嚴翼、久松廉吾、草野豹一郎、楠正伯、久松信親、近藤家從、矢口達、矢津昌永、柳川勝二、山本勇造、山岸光宣、山田胖、山ノ内弘、山本眞太郎、松平頼壽、松平康國、松岡義正、牧野鑑造、牧野謙次郎、牧野菊之助、前橋孝義、前田多藏、煙山專太郎、藤野了祐、二上兵治、近藤清次郎、後藤慶二、小室靜夫、今和次郎、昆田文二郎、小林堅三、江藤玄三、遠藤又藏、遠藤隆吉、安部磯雄、阿部良夫、安藤忠義、安藤正次、朝倉希一、淺井郁太郎、會津八一、佐野志郎、佐久間原、崎田喜太郎、三枝守富、里見雄二、阪本隆昌、佐藤功一、紀淑雄、菊地三九郎、岸本能武太、北澤新次郎、北澤武雄、木村久一、木村三郎、三淵忠彦、三輪桓一郎、三宅當時、三橋久美、宮田修、宮井安吉、南晴耕、志賀重昂、志水貞彦、清水孝藏、島田鏡吉、島村民藏、權尾辨匠、鹽澤昌貞、

平沼淑郎、日高只一、樋口清策、百瀬計馬、望月嘉三郎、關與三郎、關野九郎、杉山令吉、杉山重義、杉田金之助、

●平沼理事の長野新潟行

理事平沼博士は六月一日午後八時上野驛發長野に向ひ同市着、犀北館に投じ、同二日午後一時師範學校講堂に於ける上水内郡教育會總會講演會に臨み、「文明の融合と國民の實力」の題下に講演あり。同五時城山館に催されたる同教育會の招待會に臨み、後ち同七時富貴樓に於ける同地校友會に臨み。
翌三日西洋館に於いて同地校友花園次郎、松村藤太、宮下友雄、夏目一郎、永瀬博諸氏催しの午餐の饗を受け、後ち新潟に向け出發。午後十時新潟着。篠田旅館に投宿。翌四日同地校友有志より行形亭に於いて午餐の饗を享け、午後五時鍋茶屋に於ける校友會に臨み、折柄圖書館協會用務を帯び同地出張中の市島謙吉、湯淺吉郎、坪谷善四郎諸氏と同席せり。翌五日午前明治紀念圖書館に開會せられたる圖書館協會新潟支部發會式に臨み、午後同支部主催の講演會に臨み、「食物の説」の題下一場の講演を爲し、後ち行形亭に於ける同支部招待會に臨む。
翌六日午前圖書館協會大會に列し、午後四時行形亭に於ける第二高等出身者招待の晚餐會に臨み、午後七時鍋茶屋に於ける櫻井新潟市長招待の宴會に列し、後ち更に別室に於いて渡邊新潟知事の饗應を享く。
翌七日圖書館協會諸氏に別れ、行形亭に於い

て校友有志の午餐の饗を受け、午後五時三十分新潟縣出發、翌八日午前七時上野着歸京せられたり。

關西及九州方面

視察旅行記

理工科助教 大澤 一郎
御大典紀念建築係

一、目的 應用化學科教室内部各設備に機械工學科水力實驗室新築設計に關する既設各學校の諸般の建築上の状況を視察せんが爲めである、應用化學並に機械學上の見地は、該科教授富井松本兩氏の見るところに譲り此處には主として建築上の事のみとする紀事は多少批評的に渉るも之れは寛怒して貰ふ事とする。

二、行程 名古屋高等工業學校を振り出しに福岡工學科大學、戸畑明治專門學校、若松製鐵所、大阪高等工業學校、京都工學科大學、及び京都高等工藝學校等である。勿論序でを以て見て来た各種建築物並に建築工事場等も多々あるが夫れは本旅行の直接の目的ではない。

三、期間 三月貳拾九日より四月拾六日に渉る約二十日間であつた。

(一) 名古屋高等工業學校(三月廿日)

佐藤教授の引率する建築學科一學年の京阪地方見學團と同行し三月三十日朝名古屋着雨巾一行と離宮に向ひ正午高等工業に至る、松本富井兩氏は既に來着、共に同校機械科教授田淵京次郎氏の案内にて機械工場を參觀した、此處の水力實驗室木造約五拾坪の平屋建てコンクリート床の中央に高さ約拾四尺徑五尺の鐵製タンクと、其他二三のタービン及ポンプ等が設備されて居た、此の方面の實驗には左程重きを置かない様に見受けられた。

尙再び佐藤教授及び建築科學生一行と合し、此處の建築科設備及學生成作等を鈴木教授の案内で參觀

して夕方辭した。

(二) 福岡工學科大學(四月四、五、六、七日)

此の旅行の主なる目的は此處の水力實驗室及び應用化學等の視察にあつた、京都で松本富井兩氏と分れ大阪で更に建築科學生諸氏と分れ、高工は休暇中であつたから直ちに福岡へ向つた、京都で分れた富井松本兩氏とは此處で四月三日四日の兩日落合ふ筈であつたが、自分の福岡へついたのは四日で翌朝早々工學科大學へ尋ねたれど更に來らずとの事、不心得、前早稻田大學機械科教授で今は此處の講師をして居る遠藤直政氏を尋ねた處が氏は、新潟に開催の機械學會大會に出席して不在との事、此の日は此まゝ休養する事とした。

翌六日は大學本部建築課に倉田技師を尋ね、工學科大學に案内された(八日迄は休暇の爲め各科教授不在)

(イ) 水力實驗室 此處の水力實驗室は四拾坪餘の煉瓦造平屋建てである内部は中二階を設けタンクは建物の一隅にある。タービンポンプ等が整然と配置されて居れど夫等の數に對して場所狭くなるしき様に思はる、水溜は外部に隋圓形にコンクリートにて造られ二分して一つは深拾尺一つは七尺程とし、此の水が内部のワエルトと續きポンプで吸ひ上げ各種の實驗をして再び此處に流れ込む装置である、此處に見るべきものはクレーンを設けた事で、エッキステンションの出来ない建物とした事は其の缺點である様に思はれた。

(ロ) 應用化學科 實驗室は教授用及び學生用の二ヶ所に分れ前者は煉瓦造二階建ての本館に後者は木造別館にある。教授用實驗室の大きさは三間に四間半中央に實驗機、壁際ドラフトチャンパー手洗等を設け床はリリアム敷きとして居る。學生用實驗室は機二人分四尺の四尺五寸で定性定量及瓦斯分析室等を區別し更に目下新築中のものもある。硫化水素發生室は別棟として居る。

尙同日遠藤氏新潟より歸來せりとの報に接し早速氏を尋ね翌一日更に水力實驗室の案内を約して分れた。

七日夕方迄二氏は遂に來らず不心得、福岡を辭して門司に向ふ。此處の管理局には、大正三年本大學建築科出身の稻富秋吉氏あり同氏を尋ね久し振りに快談した。

(三) 製鐵所(四月八日)

門司から電車で約四十分若松製鐵所に赴く、次長服部漸博氏に面會技師梅地健造氏の案内で主として線條工場熔鑪爐、製鋼所等を見た製鐵所構内一面の鐵道網に加ふる上にはクレーンの往來あり。ハンマーの響き汽笛の音で耳も眼も飽和され福岡のノンビリした町から來た身は急に地獄の一丁目にも入つた様な氣がした。

(四) 明治專門學校(四月九日)

九州へ來て以來本日迄一日として晴天を見なかつた特に此日の如き風さへ加へて歩行殆んど自由でなかつた。明治專門學校は、安川一家の經營で戸畑の町の北方約一里の處で土地約八萬坪、此處に學校の外教員住宅等もあり、學生は全部寄宿舎に收容して居る、的場校長に面接用務を述べて先づ、應用化學實驗室を視察して、後機械科教授沖巖氏の案内で水力實驗室を見た。

僅々四百内外の學生を收容する爲めに、三百餘萬の金が投じてあるだけ各部共廣々たるものであるが内容の點に於ては尙充實を缺くが如く見受けられた點もあつた。應用化學として別に居るものなく水力實驗室は、タンク、タービン、ウエヤー、等の外パイプの流水抵抗の測定設備があつた。

(五) 大阪高等工業學校(四月拾壹日)

拾日午後大阪着、夕方本大學建築科出身谷本増田、

辰野、伊藤、山口、廣瀬の諸氏に會合佐藤教授も來合せ一同快談に時を移し給一時過ぎ分れた。翌日堂島なる大阪高等工業學校に校長安永義章氏を訪れたれど病氣不在、學校も本日より始業にて教授諸氏も不在で教務係員の案内で機械科及應用化學科を見た校舍は、二十餘年前の建築にかゝるといふ、水力實驗の設備は僅かにポンプあるのみであつた、應用化學科は殆んど見る可き設備でなかつた、目下市外に移轉改築の豫定と聞いて何等新設備を加へない故であらう。

(六) 京都工學科大學(四月十二日)

十二日京都に出て同日應用化學科を訪れたれどポートレックスの翌日にて休校の爲め教授に面會するを得なかつた、此處の應用化學科は其の内を第一部第二部に分ち、第一部染料寫眞等、第二部は油を主として居る目下増築中で工事中の設備を見る事の出來たのは幸であつた。

機械科に朝永博士を訪ひ設備の概略を聞き金子博士の案内で實驗室を訪る、實驗室は機械工場の一部分にあつてタンクは建物の外にあり、内部にはポンプベンチュリメーターウエヤー等が僅かに並べてあつた。従つて建築として何等見るべきものもない。此處の中央實驗所内に土木機械聯合の水力實驗室が新設中である、之れも建物は教室の床をとり放ち内部にはコンクリートのダクト外部に水溜があるのみである、此は豫算の都合で本年度は以上の工事をして來年度に更に豫算を取り完成する豫定の事であつた、従つて此處でも建築上充分な満足を得る事が出来なかつた。

(七) 京都高等工業學校(十四日)

學校は工學科大學の隣接地で圖案科の武田吉一博士を訪れ、圖案科各室の案内の後で各科の實驗室を一巡した。此の校に紡織色染圖案の三科あれど何れも一年の間は化學及物理實驗を課せられて居る。化學

實驗室は定量性及工業分析の三部に分れ、建物は木造平屋建て古い、内部は整然として居る。床は木造で天井は比較的高く換氣も充分の様に見受けた。以上は各學校の設備の極めて概略を記述したもので詳細に渉るのは此の稿の目的でないから此處には省略する事にした。

本大學の應用化學も昨年拾壹月工事入札をして既に工事は地上棟瓦積み迄に立上つて居る、見るべきものは配置より設備の状態であつた。學生の數の割に極めて廣く場所を取る事の出来る學校と比較する事は出来ないが、缺點特長交々見て参照するに足るもの少くなかつた。

機械科の水力實驗室は九州大學が最もよかつた、本大學では目下設計中のものは廣さは此處よりは廣いが二階建てである爲め何れも以つて直ちに範とするに足るものはないが二階建ての階下でも充分設備され得るものと考へられた。終りに前記各學校教授係り諸氏の懇切なる御指導並に地方校友諸君の種々御便宜を與へられし事を深謝する。(大正七年四月二十八日)

●圖書館報告(自三月至五月)

●閱覽人員及貸出圖書數 三月分閱覽統計左の如し。

開館日數	三十一日
種別	閱覽人員
學生貸出	一五、七五七
特別貸出	一一三
館外貸出	一三八
公衆貸出	二八六
合計	一六、二九四
一日平均	五二五・六一
	一、〇二三・四八

●圖書新加月報 本館三月分新加圖書は總計百九十六部四百四十一冊にして、内和漢書四十六部百九十二冊洋書百五十九部二百四十九冊なり。これを細別すれば左の如し。

洋書之部

部 門	購 入 寄 贈 合 計			
	部數	冊數	部數	冊數
歷史傳記	六	三三		六三
法 律	二	三		三三
哲 學				
政 治	二	四	二	四六
經濟財政			二	二
文 學	二	三		二二
語 學				
地理紀行	一	一		一一
教 育			二	二
心理倫理	五	五		五五
理 學	五	六		五六
社 會	三	三		三三
美 術	三	三		三三
宗 教	二	二		二二
字 書	一	一		一一
統計曆報告	〇	二		〇二
商業交通銀行	二	二	七	九
軍 事				
圖書館書史學	一	四		一四

和漢書之部

内研究室用廿五部廿六冊

部 門	購 入 寄 贈 合 計			
	部數	冊數	部數	冊數
歷史傳記	一	六		一六
地理紀行	二	三	一	三三
宗 教				
哲學倫理經學				
法 律	二	二		二二
政 治	二	二		二二
經濟財政	一	一		一一
統計報告				
國 文	一	三	二	二六
理 學	二	四		二六
教 育			二	二二
小 說	一	一		一一
支那文學				
語 學				
外國文學				
美術工藝	一	七		一七
產 業				
合 計	一三	三三	一六	一七五〇・二四九

●閱覽人員及貸出圖書數 四月分閱覽統計左の如し。

●圖書新加月報 本館四月分新加圖書は總計百六十二部四百六十三冊にして、内洋書百五部百拾五冊和漢書五十七部三百四十八冊なり之を細別すれば左の如し。

開館日數	二十九日
種別	閱覽人員
學生貸出	一一、三九九
特別貸出	九四
館外貸出	一〇七
公衆貸出	二〇六
合計	一一、八〇六
一日平均	四〇七・四八
	八二〇・二〇

部 門	購 入	寄 贈	合 計
隨筆叢書			二
體操遊戲			一
兵 事			四
醫 學			四
新聞雜誌			四
合 計	二	四七	四九

大隈侯爵紀念

品贈呈資金申

込者芳名

(大正七年七月三日) 迄ノ内第一回報告

一金百圓宛

男爵 澁澤 榮一殿

內藤 久寬殿 昆田文次郎殿 増田 義一殿

一金五十圓宛 原 富太郎殿 堀谷左二郎殿

石井 政吉殿 高山 圭三殿

一金拾圓宛 齋藤 義一殿

齋藤 義一殿 松山忠二郎殿

一金拾圓宛 齋藤忠太郎殿

德永 重康殿内々崎作三郎殿

淺野 應輔殿 鹽澤 昌貞殿 田中 穂積殿

井上 友一殿 志賀 重昂殿 李 士 偉殿

牧内元太郎殿 森 盛一殿 明渡知瑜太郎殿

赤田 盛一殿 加納鶴次郎殿 石田 武亥殿

孫 永 詢殿 渡邊清次郎殿 武田 鼎殿

風間 新助殿 大島長重郎殿 鎌目 謙吉殿

吉川 仙藏殿 鶴澤 宇八殿 名取 夏司殿

久富 久吉殿 岡橋芳太郎殿 三好榮次郎殿

佐保宗三郎殿 岡部菊太郎殿 堀 洋三殿

田島 信一殿 後藤 信治殿 權藤四郎介殿

笠井 保殿 村上 濱吉殿 秋山 忠直殿

金津 熊夫殿 鈴木熊太郎殿 都倉 義一殿

増田稻三郎殿 原 安三郎殿

一金五圓宛 白髭武三次殿 奥 忠彦殿

館岡 幹殿 泉田 利宗殿 藤田 若水殿

中山 豐三殿 佐藤 鐵郎殿 松原 達藏殿

阪東幸太郎殿 杉村吉之助殿 三好 直英殿

松永 功殿 太田 其輔殿 丁 鑑 修殿

佐藤德一郎殿 赤木 龜一殿 稻田 直道殿

田村 三治殿 古賀 光太殿 椎木 春原殿

宮富 賢三殿 稻生龜之助殿 矢口長右衛門殿

野村勘左衛門殿 山田伊太郎殿 寺尾 熊次殿

岡咲禮太郎殿 田中 傳太殿 濱口 勝殿

黒川清右衛門殿 大井 憲照殿 森 六郎殿

高橋文五郎殿 永井柳太郎殿 鶴原梅次郎殿

大濱忠三郎殿 原 澄治殿 小林八右衛門殿

佐藤孝三郎殿 秋野 光廣殿 大矢 史朗殿

高島益之助殿 吉田 三市殿 石黒大次郎殿

長谷川苗實殿 石丸 正誠殿 岡崎 正見殿

松本益太郎殿 兼子 洋平殿 青木 謹吾殿

村山 欽治殿 竹谷 幹吉殿 瀨下 清道殿

横尾 輝吉殿 上田 晴雄殿 篠原 彌吉殿

奥田源兵衛殿 久米伊豫太郎殿 伊藤 富藏殿

藤井與一右衛門殿 茂家殿 稻田 元長殿

奥村千太郎殿 山根 忠興殿 田邊 孝三殿

揚 小三郎殿 中島 復殿 柏井 光彦殿

石附慶太郎殿 井上 雅二殿 西田常三郎殿

河邊七太郎殿 南 英一殿 中川 末吉殿

大松 藤吉殿 中村 喜藏殿 小野 俊三殿

角 逸三殿 立花 猛殿 菊地恒八郎殿

手東耿之介殿 宮田 脩殿 安部 磯雄殿

杉山 重義殿 山田 三其殿 中島半次郎殿

前田 多藏殿 中村康之助殿 種村 宗八殿

小久江成一殿 坪内 信殿 三枝 守富殿

鈴木喜三郎殿 瀨川 光行殿 大熊 元吉殿

増子喜一郎殿 岡田 猛熊殿 金 性 洙殿

石尾信太郎殿

一金拾圓宛 松本恒之助殿 福本清次郎殿

山口 聖吉殿 堀 重三殿 田中 義一殿

和田 巖殿 佐藤 忠吾殿 西村佐兵衛殿

中野 潔殿 森田 卓爾殿 松井 敬三殿

田村 肇殿 村上 道保殿 橋 山人殿

猪瀬 誠意殿 淵田長一郎殿 溝口 半六殿

關 力夫殿 武衛 義治殿 金子 智殿

中島 喜八殿 池田 省三殿 松村 源藏殿

田中 富之殿 鈴木 音次殿 齋 相兼殿

永富 貞平殿 田澤 康民殿 鶴田 恒雄殿

遠藤 剛三殿 辻村 其衛殿 近藤 博殿

富村増太郎殿 桑原 淳實殿 廣田 光威殿

永山 孝造殿 大森慶次郎殿 錦織 重之殿

渡邊 漸殿 山川 瑞三殿 荻窪 潔殿

細田 泰介殿 新見 敏樹殿 山本信一郎殿

遠藤嘉右衛門殿 倉田準五郎殿 前田雄之助殿

中山 好次殿 横松倫一郎殿 島野 金吾殿

越川福太郎殿 金丸親太郎殿 八木 香苗殿

小寺 敬孝殿 小野 松彦殿 庄野 信治殿

小山 愛司殿 原田 繻造殿 鈴木治一郎殿

齋藤 武俊殿 白杵伊三郎殿 山崎文五郎殿

岡 侃殿 西江 瀧殿 矢島 榮助殿

木野 正俊殿 井上 重治殿 國領 榮一殿

八木 實殿 藤並 羊藏殿 佐々木原進殿

原 嘉道殿 阿部 直造殿 鈴木善治郎殿

香田 五郎殿 石原辰之丞殿 山田 隆治殿

阿南 卓殿 岩岡 真藏殿 中野 勇平殿

植村 敏樹殿 林 尙夫殿 松尾 茂男殿

松谷 徹殿 白木 弓弦殿 上片平直輔殿

小川 寅六殿 岩田 一郎殿 柳川 勝二殿

立石 謙輔殿 戸水 寛人殿 松崎藏之助殿

岡田朝太郎殿 山本 忠興殿 武信由太郎殿

田村 保殿 出雲井忠則殿 樋口 巖殿

山野逸象殿 小林 啓邦殿 淺川 和男殿

香山安之助殿 田中誠次郎殿 八木 勤作殿

一金貳圓宛 松岡 義正殿 大瀨甚太郎殿

副島 義一殿 杉田金之助殿 大森金五郎殿

西松 唯一殿 椎尾 辨匡殿 木多淺治郎殿

大東直太郎殿 桑木 嚴賢殿 伊地知純正殿

高桑 駒吉殿 山岸 光宣殿 菊池三九郎殿

永井 一孝殿 高杉 瀧藏殿 岸本能武太殿

吉田 世民殿 青柳 篤恒殿 煙山專太郎殿

土屋 詮敬殿 佐藤 光尾殿 小竹文次郎殿

松村 謙三殿 安念次郎左衛門 古橋 林司殿

天野 行武殿 杉 三郎殿 田中周之助殿

堀 榮二殿 關谷金一郎殿 阿部虎之助殿

山田 清作殿 阿北 精三殿 堀尾 春雄殿

竹下浦次郎殿 金 英 鎮殿 鄭 寅 韶殿

水崎 保殿 木塚 常三殿 安保雄四郎殿

櫻井 京造殿 西川 六郎殿 沖津 大象殿

山田 顯義殿 矢野 武一殿 花川 八藏殿

重城 康三殿 柳田 鐵三殿 阿部 錄郎殿

字野 名翠殿 朝賀 忠勝殿 藤井 精殿

坂田 禾慶殿 千々崎嘉助殿 長峰龜太郎殿

三堀 寛殿 黒岩 正義殿 小林重太郎殿

小西 利雄殿 堀部久太郎殿 矢島朋之丞殿

福富 貫二殿 松本 新六殿 神原 守文殿

多田 直通殿 戸塚巳三郎殿 高柳 勝治殿

小柳 精藏殿 小林伊太郎殿 浦田 正名殿

山下覺次郎殿 仙石 久直殿 前田 利功殿

小暮 省三殿 中原 望繁殿 白井實樹太殿

久保源九郎殿 伊江 朝助殿 小澤 二郎殿

井上 允殿 尹弘 變殿 川上 正喜殿

岡田惣一郎殿 森 敬則殿 廣瀬安太郎殿

獅子内謙一郎殿 佐藤 昌平殿 須田 武雄殿

高橋嘉次郎殿 宇賀 龍雄殿 戸田 敬悅殿

角田美之輔殿 太田 秀雄殿 古屋 守次殿

廣瀬 濟殿 藤澤文一郎殿 宇都宮虎二殿

小林多平治殿 青鹿 東殿 福田 梅吉殿

八田 喜三殿 石本岩三郎殿 原田 鎗三殿

陣内 喜三殿 濱名 博綱殿 牧山 耕藏殿

徳永 信男殿 綿田 久吾殿 常見辨次郎殿

別府 敏治殿 柏原龜三郎殿 和田忠一郎殿

(以下次號)

(備考) 大正七年七月三日迄に資金離出申込人員一千五百五十六名此類金參千五百參拾九圓なり。

●三六會近況 明治三十六年英語政治科出身者より成る同會は此度同會員林久治郎氏が、濟南總領事より英國大使館附書記官に榮轉し赴任の途に就くを祝する爲め五月二日一會を催した。會する者十一名、例によつて舊を談じ歡語更の移るを覺えなかつた。此機會に於て會員身上の近時の異動を報告する。

外務省畑では三六會は林君と佐藤君とを有するのみだけれども、林君は卒業翌年に試験を通過した駿足で、爾來支那より米國に移り、更に青島占領後最初の行政官として濟南に封ぜられ以て最近に至つたので、凡てトーン／＼拍子で歴進し甚評判が良い。特に此度は交戰國中財力の中心なる英京に赴任する事故、君が多 銀へた交際上の腕と徹底的識見とは蓋し大に見るべき働をするであらう。佐藤君一君は學生時代から變り者の稱があり、同人間からは萬朝記者を以て最適職業とせられて居たのに、先づ關西に實業生活を試み、次で飄然轉じて外務省に這入つたもので今日でも同君の變り者たる事は同僚間の通り者ださうな。君今數年振りの賜暇で歸京し郷里伊勢に靜養して居るが、歸來數月なるに未だ上京して舊友に顔もみせぬなど矢張氏一流である。最近數年の間に外國へ出たのでは畑田保次君が大阪朝日の米國特派員として紐育華盛頓の間に在ると、矢澤千太郎君が本年春天津共立學堂々長として赴任したの丈と思ふ。大阪朝日多士儻々其中でも外國派遣希望者數ある中に畑田君は入社後年所を経る事多からざるに特に選まれたるは大成功といふべきである。

矢澤君の支那に於ける經驗と教育家としての氏の經歷は素より氏の新任所に於ける成功を疑ふの餘地を與へない。

十數年間米國に居た堀内俊太郎君は一昨年初秋一度歸朝し、昨年夏再び渡米、本年春復た歸朝此程大阪の株式仲買中に其人ありと知られたる手腕家島德藏氏に知られ、同氏の客分として其



會 六 三

事を助ける事となつたさうな。堀内君はコロンビア在學當時取引所を專攻し浩濶な論文もある特に昨年始以來支那に於ける投資事情を研究してゐるから、仲買人とし、又上海に日支人取引所を創立せんとしつゝある島氏の參謀として極めて適任であらう。堀内君と似た境遇の如く思はるゝのは佐々木庄

次郎君である。君も米國生活が十四五年續いた昨年歸朝後間も無く自働車會社に關係し其取締役となつてゐるが、最近には川崎家の經營になる貿易部の參謀となつて智囊を絞つて居る。氏は常に凡流を抜く案を立て、之を斷行する流の人で、從來は折角の名案も充分の資力が之に伴はざる爲め未だ富豪名簿に名を列するに至らぬが、今の様な財力家の地盤に立たば大に氏の計策を實にする事が出来る事であらう。

昨年末古河家で其組織を改めた際從來の營業部が獨立して古河商事會社となるや、其常務取締役役に擧げられたのは荻野元太郎君である。氏や實に三六會の出した實業家中腕一本で進んだもの、頭目で、首都に於る大會社の重役は君を以て嚆矢とす。君は早稲田入學以前から既に古河の人で、古河の商事部は君其人が何にも無い所から造り出して今日に至らしめたのだから、氏の社に於ける地位を判斷するに足るべく、同社は益あるゆる方面に手を擴げる計畫ださうだから此の發展や真に目ざましきものがあらう。

事は最近で無いかも知れんけれども、吾々の聞いたのは最近であるから、一緒に報するが、幸尾隆太郎君は今がフォードなる米國人と共に東京海上ビルディングに於て米國よりの輸入業を經營して居る。氏は多年外人に密接な縁があり、當今經營中の事業も經費掛らずして大繁昌だといふ。

以上は最近の異動をのみ舉げたのだが、際立つて異動せず、デリ／＼上りに既に重要な地位に上つて居る人又は既に勢力を得つ、ある人々の中々多い。其一部は校友名簿の肩書を見た丈でも別るが、單に「社員」などなつて居るの中に中々それがある。が餘り長くなるから今は茲に筆を擱く。(幹事報)

●四十一、哲學科出身者懇親會 五月廿九日夜神田小川町ときわに開く。卒業後十年振りの會合とて、眞に談笑涌くが如く、中にも母校の現状に就ては何れも熱心に談論し、一同は特色ある文科大學建設の必要を痛感した。此の愉快な會合は一同の希望で今後時々開く事になつた。七月下旬には北君洋行の送別會を開く筈。當日の出席者左の如し。

- 辻忠真(前橋より懇・上京) ● 日高猪兵衛(九州より上京中) ● 北哈吉 ● 宇佐支雄 ● 黒木勲藏 ● 武田眞一 ● 竹内謙六 ● 木山十彰 ● 伊藤輔利

● 四政觀櫻會 大正四年度專門部政治科出身有志の催なる本年度觀櫻會は四月十四日(日)午前より小金井に於て開催せられたるが折悪しく數日來引續き雨天なりしに當日も朝來曇天にて天候氣遣はれたる爲め出席者は左の四名に過ぎざりしが、午後よりは晴天となりたるを以て元氣復活し、六七分通り開きたる櫻花の下に遊を敷きて、月桂冠を抜き折詰を開きつ、懷舊談時局談に氣焰萬丈、時の移るを知らず、晚景に及びて校歌の聲に不規律極まる花觀連中に一種の引締りたる氣分を與へつ、俾上の人となり、國分寺驛より汽車にて歸京したり。(主催者報告)

影山 清雄 大島亦四郎 安藤 金平 笹澤 三善 ● 關西校友の總長祝壽紀念品贈呈 五月廿三日關西校友大隈總長祝壽紀念品贈呈委員早瀬太郎三郎氏上京の上紀念品銀製雙鳩置物壹基を總長に贈呈せられたるが、今其の紀念品贈呈文其の他を掲げて、經過詳悉の資とすべし。

拜啓

陳者像て各位の御賛助を得たる大隈總長閣下へ祝壽記念品贈呈の件に就ては其後吾々共數回會合協議の結果御高壽に因み銀製雙鳩置、壹基を調製贈呈の事に決定當地の名匠天岡均一氏に依囑作製中の處先般漸く出來上りたるに付去月廿三日を以て委員の一人早瀬太郎三郎君携帶上京親しく總長閣下に贈呈致候處閣下には殊の外御満足にて各位の御厚志を喜ばれ宜敷傳言方吳々同氏へ懇囑せられ候趣に有之候間御了知被下度此段乍延引御報告迄如此御座候 敬具

追て記念品に添付したる贈呈文及本件に關する收支計算左の通りに有之候併せて御承知被下度候

大正七年六月十五日

委員總代

小川 爲次郎
砂川 雄峻
原田 駒之助

記念品贈呈文

物的にも心的にも世界的評價の貧弱を免かれざる日本に於て大隈侯を有するは日本國民の誇り得る極めて少數なるもの、一なり候か世界に對して日本を代表せらる、資格は官僚的勢力たるによるにあらず閥族の頭目たるによるにあらずして唯侯の赤裸々たる人格的權威と光輝とによらずんばあらず固より元老たるによらざる如く早稻田大學總長たるにもよらざるは勿論なり従つて生等は決して侯爵閣下の國民的共有性を無視して之を獨占せんとするものにあらざるも

特に侯爵閣下に對して熱烈なる家族的眞情を表白するは獨り生等の有する特權なるを信す侯爵閣下亦生等を視らるゝに師弟の誼よりも寧ろ父子の情を以てせられ昨年畏くも 天皇陛下より天盃竝に鳩杖を下賜せらるゝ、や直ちに之を祖先の墓前に告げらるゝ、と同時に大阪に於て生等を招かれ閣下の共に優渥なる天恩を感佩するの光榮に浴せしめられたりき生等の歡喜何物か之に如かん而も當時旅程限りあり閣下に對して生等の祝福と感謝とを表する機會を有せざりしは最も遺憾に堪へざりし所なりき乃ち有志相圖り優渥なる天恩を記念すると共に侯爵閣下竝に令夫人の壽を賀する爲め恩賜品に因み鑄金家天岡均一に囑して銀製雙鳩壹基を製作せしめ茲に謹んで閣下に奉呈するに至れり技拙にして質粗なるも生等の閣下に對する眞情の結晶たるを察せられ笑納せられんことを慇懃に堪へす

大正七年五月吉日

早稻田大學關西校友

砂川 雄峻
外二百八十四名

侯爵 大隈重信閣下

贈呈費用收支報告書

總收入 一金五百八拾圓五拾錢

(寄附者二百八十五人)

總支出 一金六百拾九圓七拾壹錢

內譯左の如し

金五百圓 純銀製 雙鳩壹基 鑄造代
金五拾四圓三拾錢 同置臺 二重桐箱 包裝代
金參拾六圓八拾錢 通信費

金拾六圓九拾錢 印刷費
金壹圓六拾九錢 集金費
金拾圓 筆工料及雜費
差引金參拾九圓貳拾壹錢不足額
右報告候也

●新潟校友會

新潟校友會は母校理事平沼博士、市島謙吉兩氏の來港を機とし六月四日午後六時より鍋茶屋に於いて臨時大會を開催せり。主賓は平沼博士、市島謙吉兩氏に母校圖書館顧問湯淺吉郎氏、博文館顧問坪谷善四郎氏其他母校贊助員齋藤喜十郎、櫻井市作、鳥居錦次郎、佐藤伊助、坂口仁一郎の諸氏及校友を合せ約三十名、安藤文祐氏開會の辭を述べ松井群治氏、平沼先生が昨年來學校紛糾の難局に當り爾來奮勵努力の效空しからず今や校規の改定を見るに至り校運益隆盛を示し居れるは深く感謝に堪へず、又市島先生が多年母校經營の重任に當り常に犧牲的精神を以て高田先生を補翼し拮据勉勵參畫其宜しきを得たるは校友一同の感謝措かざる所にして假令限候の大を以てするも苦心經營、市島先生の如きあるに非ずんば何ぞ母校今日の隆盛を見るを得んや世人動もすれば、高田、坪内、天野の三博士を以て母校の三尊と稱するも市島先生を併せて正に母校の四尊と稱すべし。今や敬慕すべき此恩人は去つて閑地に就けりと雖も母校の隆盛を念とし舊の如く校友を指導されんことを望む云々。と述べ、次に平沼博士は昨年代表理事就任の事情を述べ更に昨年の紛糾に伴ひ萬一學生減少せざやと憂ひたるも今在學生は一萬三百餘の多數に上り、昨年比し六百餘人を増し、基金の如きも順調

に收入されつゝ、ありて何等憂慮の要なかりしとて母校最近の實況を報告せられ終て宴に移り例に依りて校友の氣焰虹の如く十時散會せり。當夜の出席者左の如し。(順序不同、幹事)

平沼 淑郎 市島 謙吉 湯淺 吉郎
坪谷善四郎 櫻井 市作 鳥居錦次郎
坂口仁一郎 齋藤喜十郎 佐藤 伊助
久須美東馬 舟崎 仁一 今川 孝吉
安倍 邦吉 松本 弘 小川喜七郎
安倍邦太郎 山本 平吉 長谷川 轍
高橋 鏡二 小林 存 廣島 一郎
石塚 三郎 小黒伴十郎 中村 孫一
鶴巻謙次郎 川上 法勳 齋藤庫四郎
安藤 文祐 荒川 謙二 松井 群治

●長野市臨時校友會

母校代表理事法學博士平沼淑郎氏長野縣上水内郡教育會の招聘に依り來長、當市師範學校講堂に於て聽衆四百有餘名を前に「文明の融合と國民の實力」と題する二時間餘の講演あり。當夜長野市に宿泊の折を機とし、茲に當市校友會を市内富貴樓上に開く。事唐突の際なりしも、會者二十名。席定まるや村松氏開會の挨拶をなし、次で平沼博士起つて昨年母校紛擾の後らを受けて母校經營の衝に當られし事より説き起し諄々として既往の經過と將來の方針とを述べて、其眞相を悉され一同愁眉を開きて母校の爲の彌々幸多かれと祈りたり。

饗宴酣なるに及び清興談或は歌ひ或は舞ひ殊に博士の謠、一座謹聽感興盡くるを知らず。最後に都の西北を合唱し早稻田大學並に博士の萬歳を三唱し、各自歸路につきしは午後十一時過なりき。翌日は校友三々五々先生を訪れて、清談の間

先生の揮毫を請ひ、更に西洋軒に於て先生を主賓として午餐を共にし、談話の裡に母校の發展其他に付き先生の教を請ひ且つ一同の希望を述べると極めて打解けたる歡會は一同の仕合せとする處なりき。同日午後二時新潟市に向はる、先生を停車場に見送りたり。當日出席諸氏左の如し。(會幹報)

- 花岡 次郎 村松 藤太 鈴木雄次郎
- 夏目 一郎 岸田 剛 小林 久七
- 町田繁太郎 高江 幸彦 渡邊 方
- 中川 清哉 篠原 惟運 柄澤 雅治
- 奥村 誠司 大脇 篤二 西澤 眞三
- 若林 忠武 永瀬 博 萩原 實
- 宮下 友雄

●常磐地方校友の徳永理事歡迎會、常陸磐城海岸一體の地は炭礦會社の數甚だ多く、從て各會社に關係ある早稻田出身者其數夥しきに拘はらず、未だ連合會の好機を得ざりしが、幸に今回徳永理事の炭田調査用にて來着せられたるを機とし、六月九日校友會支部會を平町谷口に開きて之を歡迎せり。事唐突なりし爲め會する者十二名なりしも胸襟を開き打寛きたる有益の會合なりき。猶同十二日早稻田工手學校卒業生及び同氏の薰陶を受けたる者相集まり同谷口にて同理事の歡迎會を催せり。來會者三十一名極めて盛大なる會合なりき。

●香川縣校友の宮田理事歡迎、理事宮田脩氏五月十七日講演の爲め香川縣坂出町に出張の際、同地校友島田恭平、山下一二、小澤常一等の諸氏同宮田理事を招請して小宴を催し、談話に夜を更したりといふ。

●函館校友會、六月十六日午後六時より當地五島軒に於て開會す。席上桑原氏開會の挨拶

ありて後ち七月一日來函の豫定なる母校野球團の歡迎準備に付相談する處あり。且つ野球團監督として安部先生の來函せらるゝを幸ひ同氏に乞ひ一日の講演會を開催する事に決定したり。宴半ばにして滯留中の母校庭球選手福田寺内兩氏の來會するあつて運動に對し多大の感興を興へたり。久方振りの會合として各自胸襟を披き友情を温め思はず快談に時を過し閉會したるは午後十時半なりき。出席は左の拾四名なり。(イロハ順(幹事報))

- 西村 忠一 新田 政樹 兵藤 榮作
- 屋崎 孝禮 龜井喜一郎 竹内 行男
- 牛尾 英二 工藤勝太郎 桑原 安二
- 國領 榮一 青木 秀彦 佐藤 彌八
- 木島 光治 關口 聖三

新嘉坡校友消息

我が早稻田勢力の日進月歩海の内外を問はず發揚し行くは吾等同人の常に欣快とする所なるが、新嘉坡を中心とせる當地方に於いても校友の數は年々増加一方にて、目下調査中なれども、其の明確なる者は二十五名に達せり。而して尙觀察調査其他の目的を以て來南する校友も少からず、從て折々校友會を催し早稻田主義を發揮する機會亦年に頻繁を加へつゝあり。即ち昨秋には永井柳太郎氏の歡迎を兼ねての校友會開催あり。本年初頭には井上雅二氏を迎へたる新年宴會を開き、最近には古藤秀三氏の歸朝を送らんが爲め、一ラシチを借切り朝九時より夜八時に及ぶ迄新嘉坡島一周といふ痛快な校友會の新レコードを造り、更に去五月十日には昨年來南以來蘭領政治經濟狀態及投資の調査に努力せられ居り

たる井上雅二氏の歸朝を壯んにせん爲め、來南人士の間には月の眺めを以て有名なるタンジョンカトンのシビーホテルに晚餐會を開催したるが、六時半までに自働車を驅つて集る者左記十四名。近來の盛會にて七時半より芝生の上の野天食堂にてそよ吹く海風に吹かれながら晚餐を共にし、談話の裡に愉快なる一夕を過ごし、九時散會せり。(星生報)

- 出席氏名
- 井上 雅二 後藤 吉武 酒井鶴之助
 - 竹内 精一 矢野 義夫 居城新三郎
 - 熊谷 丑松 吉本 正也 小林 武
 - 佐藤 祐三 手塚 貞吉 初谷
 - 角村 角輔 星兵右衛門

氏名	卒業年度	關係	地位
木村 大介	三二	行	三五公司 總支配人
牧野 紫朗	四五	大商	同 總支配人
後藤 吉武	三八	大政	南洋ゴム 總支配人
河野		同	同 總支配人
酒井鶴之助	四二	大商	古河ゴム 總支配人
笠島友次郎	五	大商	同 總支配人
居城新三郎	四二	大商	南亞公司 總支配人
熊谷 丑松	四〇	大文	同 總支配人
青木 三郎	六	政	宿大ゴム 總支配人
佐藤 祐三	三	大商	マツイゴム 總支配人
矢野 義夫	三九	大政	日東ゴム 總支配人
福田三千百	二	法	同 總支配人

校友動靜

- 校友諸氏の動靜左の如し。
- 常松英吉(舊講師) 長崎控訴院檢察長に轉任
 - 花守 越(6政) 大阪市東區本町三丁目村井銀行大阪支店に轉勤
 - 加藤景福(5大政) 東京時事新報記者となる(神奈川県小田原町荒久八四二)
 - 宮崎 理(2政) 株式會社松江銀行を辭す
 - 武田信一(四〇大政) 東洋商事株式會社社員(大阪府西天下茶屋字濱田五四四ノ三)
 - 關 達二(四三政) 株式會社常磐會に入会(牛込區市ヶ谷仲之町三〇)
 - 石橋謙之(四五大政) 古河商事株式會社大阪支店に轉勤
 - 青山樹左郎(4政) 雜誌「名物世界」主幹(赤坂區檜町六(豐文社主))
 - 芳賀榮造(四五政) 高麗人蔘製藥株式會社監査役、東京衛生研究所主任(市外東鴨向原三四三八)
 - 清田左京(四五大政) 米國より歸朝(牛込區辨天町五八)
 - 正木次郎(2政) 南洋油脂株式會社南洋拓殖部勤務 (Davao Commercial Co., P. O. Box 23,

山田 政記	四三大政	馬來ゴム	支配人
遠藤 隆夫	三〇	政	ホルネゴム 常務取締
武田 圓次	三七	史	領事館 書記生
初谷喜一郎	4	大商	増田支店 輸出掛主任
原 忠宗	5	大商	同 輸入掛主任
竹内 精一	四〇	大商	日本賣藥支店 支店長
小林 武			郵船出張所
古藤 秀三	四二	政	南洋日々新聞 支店長
手塚 貞吉	四四	大商	同 支店長
星兵右衛門	6	政	同 支店長
藤田四郎	四二	大商	マツサージ業 支店長

Davao, Philippine Island)

●若林成昭(二六法) 東京市會議員に當選す

●淺川保平(四二大政) 同上

●南淨智成(三三政) 福井高等女學校長となる

●尖戸嘉憲次(三九大政) 日本郵船會社神戸支店副長となる

●井本滿助(三二政) 樺太拓殖部長に任ぜらる

●佐藤憲弘(四政) 東京日々新聞記者に轉ず(半込區矢來町三山里ノ十六號)

●伊藤孝平(二政) 栃木縣鹽谷郡玉生村大字寺島大名澤鐵山事務所に轉勤

●川口精一(三八大政) 大阪中之島久原鐵業株式會社賣買部勤務(兵庫縣西宮東口清香園)

●石田貞藏(四二大政) 秋田市秋田商業會議所書記長となる

●川上一郎(三大政) 長岡銀行を辭し新潟縣古志郡東谷村字小向に歸住

●大森忠男(四五大政) 大阪市大阪毎日新聞編輯部に轉ず

●東 忠藏(三八法) 島根縣理事官に轉任

●吉永半平(六法) 神戸市元居留地東町一一三、日本國產株式會社勤務

●中野作樂(五法) 門司市西本町内國通運株式會社支店に入る

●山下覺次郎(二五法) 甲府地方裁判所檢事正に轉任す

●服部正明(三三法) 天津地方裁判所檢事正に補せらる

●原田壽男(四五大法) 桂川電力株式會社に入る

●(麻布區區會) 米國より歸朝廣島市西本川に於て米穀肥料商西屋商會經營

●林葵未夫(三八大法) 古河合名會社東京本店に轉勤(市外瀧野川町字上中里一五八)

●寺尾熊次(四二法) 民國交通部直轄吉長鐵路管

理局勤務(滿洲長春新市街東二十三區三十四號)

●安田 充(六法) 大分縣大野郡小野市村木浦鐵山原田鐵業事務所に轉勤

●孫永高(三法) 朝鮮大邱覆審法院勤務

●岩海 綠(二法) 小石川區表町一〇二日本礦造工業株式會社勤務

●橋本英夫(四二法) 名古屋市東區東本町二丁目大阪電氣商會支店に轉勤

●片山三郎(三四行) 農商務省水產局漁政課長農商務書記官(市外千駄ヶ谷四二六)

●天野行武(二四行) 朝鮮湖南線裡里里信託社社長

●田中孝一郎(六文) 外國語學校獨逸語科入學

●古川忠治(六文) 三越吳服店店員となる

●皆川圭一(六文) 米國に渡航

●宗川 保(六文) 三越吳服店店員となる

●月花俊隆(六文) ヘラルド記者となる

●大久保好美(六文) 白木屋吳服店店員となる

●菅原英次郎(六文) 實業に従事

●東田茂信(六文) 德島縣立瀨養中學校教諭となる(同縣瀨養林崎町廣路丁)

●橋本真藏(三八英) 株式會社松尾鐵工所所長となる

●永山定富(四〇大文) 株式會社橋本店貿易部主任となる

●山住 信(四四大文) 兵庫縣立蠶業學校辭任信州飯田町に歸住

●館野癸三郎(四一大文) 神奈川縣厚木中學校に轉任

●佐伯林象(四四大文) 久留米商業學校に轉任

●武井喜十郎(四五大文) 茨城縣立水海道中學校に轉任

●尾崎默如(四一大文) 廣島縣立西條農學校に轉任す

●寬甲太郎(二大文) 栃木縣私立烏山中學校教諭

となる

●井口小彌太(四五大文) 長野縣立上田中學校に轉任す

●小澤恒一(四一大文) 廣島高等師範學校德育專攻科に入學(廣島市大手町九ノ四二)

●土肥政勝(六文) 廣島市私立廣慶中學校教諭に轉任(同校内)

●大森慶次郎(二六文) 貴族院議員に當選す

●秋月汎愛(二大文) 野澤組を辭す

●島山鴻業(三九大文) 靜岡縣沼津商業學校に轉任(同沼津町城内西條九一)

●高江幸彦(三八大文) 長野縣工業學校に轉任

●石川宰三郎(二大文) 漫畫公論社文藝美術主任

●加藤美命(二大文) 漫畫公論社政治實業主任

●久保田敏夫(七大文) 府下大崎町明治電氣會社に入る

●外尾田毅太郎(同上) 神戸市下里商店に入る

●横田忠三(同上) 高田商會に入る

●宮田鶴次(同上) 岐阜市日下部株式會社に入る

●小竹忠一(同上) 東京石川島造船所に入る

●盛田秀平(同上) 横濱本町四丁目増田貿易株式會社本店雜貨部勤務(半込區市ヶ谷町九三)

●山口 康(同上) 増田貿易株式會社神戸支店に入る

●櫻井芳賢(二大商) 横濱第二銀行を辭す

●須網綱行(七大商) 横濱市辨天通二ノ四〇田代屋本店勤務

●小島文雄(七大商) 秋田縣鹿角郡三菱尾去澤鐵山勤務(同鐵山瓜畑合宿所内)

●柴田 勝(七大商) 京橋區竹川町二〇極東煉乳株式會社に入る(半込區拂方町二五宮原方)

●山室茂樹(同上) 日本郵船會社に入り松山丸乗組となる(横濱支店氣附)

●四王天正實(同上) 同社に入り山城丸乗組となる(同上)

●秋山小次郎(同上) 同社に入り山東丸乗組となる(同上)

●立花盛枝(同上) 同社に入り新潟丸乗組となる(同上)

●松岡久治(同上) 同社に入り西京丸乗組となる(同上)

●新谷 賦(同上) 同社に入り營口丸乗組となる(同上)

●土屋 正(同上) 同社に入り淡路丸乗組となる(同上)

●竹村温次郎(同上) 同上

●小林誠一郎(同上) 三井物産株式會社香港支店勤務(c/o Mitsui Bussan Kaisha, Ltd., Prince's Buildings, Lee House Street, Hongkong)

●武良亮一(七大商) 大阪市西區立賣堀北通五丁目株式會社祿々商店大阪出張所勤務(同市北區眞砂町二)

●加納幸雄(同上) 横濱市山下町三井物産株式會社横濱支店勤務

●川福豐藏(同上) 同上

●日吉武雄(同上) 同上

●川久保 浩(同上) 増田貿易會社に入り大連支店店員となる(大連市寺内通一増田洋行内)

●犬塚 登(同上) 三井物産株式會社本店勤務(日本橋區室町二ノ二)

●深澤義弘(同上) 米國に渡航アルバロイソ大學に入學(c/o Prof. Kinsey, Valparaiso University, Indiana state(Valparaiso) U. S. A.

●山口善三郎(同上) 三越吳服店に入る(赤坂區丹後町一一)

●山田佑吉(同上) 豐國銀行に入る(半込區原町一ノ六五)

●佐藤武雄(同上) 合名會社茂木銀行本店に入る(横濱市青木町桐畑五四一)

●川島剛一(同上) 日本鋼管株式會社に入る(府下大森山王二六八六遠藤政二郎方)

●一杉信雄(同上) 大阪府泉北郡向井町瀧淺蓄電

- 池製造株式會社に入る(堺市戎之町東二ノ四七建部方)
- 藤田 眞(同上) 臺灣臺北臺灣銀行勤務
- 廣田三郎(同上) 福岡縣三池郡三池港三井物產株式會社石炭支部勤務
- 菅谷周一(同上) 大阪市北區曾根崎町日本自動車株式會社大阪支店勤務
- 三浦憲三(同上) 本所區外手町六小林商店輸出部勤務(同商店内)
- 寺島參之輔(四二大商) 神田區五軒町一七盛川商會主(本郷區本郷五ノ四〇)
- 大政正雄(三 大商) 北海道釧路西幣舞新田汽船株式會社釧路出張所主任
- 渡邊和用(六 大商) 橫濱市尾上町六丁目株式會社丸石商會金物部勤務
- 西川善助(四 大商) 三重縣桑名町玆耶鐵器株式會社勤務
- 稻村 實(五 大商) 露國より歸朝神戸市元町一ノ五七熊澤商店神戸支店勤務
- 本田芳三郎(四〇大商) 大阪商船株式會社門司支店に轉勤(舊門司會社々宅)
- 田中常吉(六 大商) 赤坂區檜町步兵第一聯隊第五中隊に入營
- 水上英三(同上) 同上
- 土谷清房(七 大商) 東京電燈株式會社社員(市外下戸塚町四五三坂本方)
- 猪田五一(七 大商) 日本銀行勤務(本郷區森川町一番地字野方)
- 田中昌平(七 大商) 古河合名會社東京古河銀行勤務(市外西大久保四八六福林方)
- 清水喜一(同上) 撫順炭坑會計課勤務(同炭坑合宿所内)
- 大野憲吾(同上) 同上用度課勤務(同上)
- 岩倉文祐(同上) 同上機械課勤務(同上)
- 法貴宗一(同上) 岡山縣川上郡吹屋町吉岡嶺山

- に赴任
- 宮田鶴次(同上) 神戸市明石町日下部汽船株式會社勤務
- 上田友春(六 大商) 日英水電株式會社社員(靜岡縣濱松市紺屋町一〇五)
- 海老原建(四五大商) 日本炭酸カレンシウム株式會社常務取締役就任(府下青梅町四三三)
- 馬場小太郎(四三三大商) 臺灣臺中榮町臺中物產商會支配人となる(同町一ノ五三五)
- 中村一二(四〇大商) 京都市下京區大和大道通四條下ル四丁目小松町 五七〇日吉株式會社常務取締役となる
- 神保 俊(四五大商) 印度盆買大阪商船會社支店に轉任
- 岩井岩城(六 大商) 大阪市北區中之島二丁目十九番地橫濱生絲株式會社大阪出張所勤務
- 朝倉好三郎(六 大商) 大阪市北區安治川南通一丁目増田貿易株式會社安治川出張店に轉勤
- 古賀小四郎(三 大商) 神戸市下山手通六ノ七七東洋ペニヤ株式會社經營
- 清水金八(四三三大商) 大阪市東區安土町二丁目綿絲布商株式會社神戸榮商店に入る(同市外天下茶屋五五二)
- 石川了吉(六 大商) 橫濱市尾上町六丁目株式會社丸石商會に轉勤
- 牧田平太郎(四四大商) 臺灣嘉義北門外二四一野澤組出張員事務所に轉勤
- 熊谷貞治(五 大商) 常總運輸會社を辭す(小石川區小日向臺町三ノ四六)
- 小平憲吉(二 大商) 樺太豐原町大倉組乾留所に轉勤
- 山崎 潔(四四大商) 札幌拓殖倉庫會社辭任(札幌區苗穂町三)
- 伊藤佐久具(六 大商) 日本郵船會社東京支店勤務(日本橋區箱崎町)

- 橫井彦一郎(四五大商) 不動貯金銀行上野支店に轉勤(下谷區茅町二ノ三〇)
- 廣瀬 博(四一大商) 朝鮮郵船株式會社元山出張所に轉勤(元山春日町二八)
- 與根李太郎(四四大商) 神戸關西學院商科教授に就任(同院商科附)
- 中川政太郎(四一大商) 神戸市仲町一ノ五〇に於いて鐵商從事
- 工藤達一(四四大商) 神戸市電氣局に轉勤(同市平野神田町三〇二本勝方)
- 澁澤音吉(六 大商) 内田商事株式會社に轉勤(兵庫縣武庫郡西須磨内田信也邸内)
- 杉浦義泰(四二大商) 神戸市榮町三丁目湯淺商店に轉勤
- 高橋信茂(四 大商) 神戸市東川崎町三菱倉庫會社支店勤務
- 高木謙吉(五 大商) 瓜哇スラバヤ臺灣銀行支店に轉勤(c/o The Bank of Taiwan Ltd., No. 29, Kembang Djepon, Seentaina Java)
- 紀 省三(六 大商) 雙町區有樂町一ノ一橫濱護謨製造株式會社東京販賣店に轉勤(本郷追分町八九百歲館)
- 遠藤剛三(四一大商) 門司市本町二丁目株式會社明正社門司支店に轉勤(同市丸山山田別荘内)
- 村松長治郎(四四大商) 神戸岩城商會に入り大阪市西區玉造橋北詰同商會大阪支店詰となる
- 及川銀太郎(四三大商) 府下下瀬谷向山株式會社島谷部製作所に入る(神田區旅籠町一ノ八)
- 岡村五六(三 大商) 神戸市榮町一丁目一三ノ二海運業美善商會勤務
- 眞弓甚五郎(六 大商) 橫濱火災海上運送信用保險株式會社勤務
- 増田松榮(四 理工) 名古屋市神樂町電話分局新藥場勤務
- 中野爭虎(五 理工) 合名會社橫山礦業所に入り

- 山形縣最上郡大藏村大藏嶺山礦場課に勤務
- 江森四郎(五 理工) 盤城炭礦株式會社に轉勤(福島縣石城郡内郷村綾社宅内)
- 寺田清一(四 理工) 靜岡縣沼津町富士水電株式會社に轉勤
- 三浦榮次郎(五 理工) 札幌區北一條西三丁目住友札幌礦業所技師
- 山本義一(五 理工) 竹内礦業株式會社に轉勤(半込區橫寺町四〇盈進館内)
- 寺澤信計(三 理工) 雙町區有樂町通一八號富士水電株式會社に轉勤
- 片岡松三郎(五 理工) 金澤市大手町九合名會社橫山礦業部調査課に轉勤
- 千葉清一(五 理工) 南葛飾郡大島町六丁目東京鋼材株式會社營業部勤務
- 柳下 實(二 理工) 大阪市西區南思加島町地先株式會社旭造船所に入る
- 西川六郎(三 理工) 三共株式會社製造第四部向島分工場勤務(南葛飾郡岡田村一三五春日野別荘内)
- 渡邊榮雄(五 理工) 青森列車電燈所主任兼電力區主任(青森市青森驛鐵道院官舎第八號)
- 中島 幹(四五理工) 合名會社鈴木商店兵庫製油工場勤務(神戸市石井町三丁目五十九番屋敷)
- 三谷 讓(二 理工) 靜岡縣富士郡白糸村富士水電内野發電所勤務
- 久保熊治(三九國) 佐賀縣立小城中學校教諭に轉任
- 中村貞久(三 英) 埼玉縣立柏壁中學校教諭
- 大石小一郎(四一國) 靜岡縣榛原郡川崎町榛原實科高等女學校教諭に轉任(同縣同郡相良町)
- 鈴木四郎(六 英) 福岡縣立嘉穂中學校在勤
- 矢口長右衛門(二〇英) 貴族院議員に當選す
- 片寄義久(二 英) 大分縣立宇佐中學校に轉任
- 速水靜雄(六 英) 私立成器商業學校教諭となる

●高月 良(5英) 愛媛縣立今治中學校に轉任
●高井正明(6英) 奈良縣立五條中學校教諭
●小宮聖次郎(四〇英) 千葉縣立佐原中學校に轉任

●島越正三(5國) 宮城縣立古川中學校に轉任
●岡田芳松(4英) 群馬縣立太田中學校に轉任
●小川潤一(四〇英) 茨城縣立水海道中學校に轉任

●加藤正造(6英) 福岡縣立柳河傳習館中學校に勤務
●加藤求周(四二英) 栃木縣立眞岡中學校に轉任
●梶田鯉一郎(四〇英) 東京錦城中學校に轉任
●寺田善吉(四二英) 廣島縣立廣島商船學校に轉任

●青谷米太郎(4國) 大阪府立今宮中學校に轉任
●秋山 寛(5國) 秋田縣立秋田中學校に轉任
●本橋力之輔(四二國) 愛媛縣立大洲中學校に轉任

●加藤太郎(四二歷) 香川縣立歌商業學校に轉任
●深澤敬明(5國) 山梨縣南巨摩郡身延祖山學院を辭し同郡増穂青柳に歸住
●下津一雄(4國) 佐賀縣立唐津中學校教諭

●二宮重雄(四〇歷) 愛媛縣立今治高等女學校に轉任
●加藤吉彦(2英) 福岡縣立中學修猷館に轉任
●岡市地行東町一七(一)

●桑江良行(四二國) 埼玉縣立川越工業學校教諭
●東京市外戸塚町諏訪一〇(三)

●福村龜雄(四二英) 長崎縣立對島中學校に轉任
●廣野猛逸(三四史) 大連市大阪商船會社支店に轉勤
●本庄圭一(5國) 大阪府地方幼年學校に轉勤
●大阪市東區東平野町五丁目藤澤塾内)

●野崎辰己(4國) 早稻田實業學校講師となる(市外東大久保一五六)
●澤田信太郎(四五推) 朝鮮銀行司事に就任京城本店勤務
●中村喜藏(6推) 札幌區北二條西四丁目一番地旅館館經營

轉居

校友諸氏の轉居左の如し。

●村上 伸(教授) 市外西大久保三二二
●神谷健夫(講師) 小石川區林町九八
●大屋 敦(講師) 下谷區上野櫻木町二、永井方
●出雲井忠朗(三八大政) 神戸市葦合町二一五番地二十八番屋敷

●畑 豐吉(四三政) 小樽區綠町二ノ二七
●高野清八郎(四五政) 支那山東省青島祝町一番地地洋行内
●都丸 隆(2大政) 市外戸塚町諏訪一七八
●櫻井孝治(3大政) 大阪市東區島町一ノ二〇矢木旅館内

●中島音治郎(三八大政) 山口縣佐波郡中關村新前町
●菊池彌三郎(5政) 赤坂區田町一ノ一〇西澤方
●里 兵右衛門(6政) Kanyo Michinichi Shim. bin Shin. No. 50-2 Victoria St, Singapore.

●畑 重三(三八政) 市外下灘谷三八三
●伊東繼司(四二政) 市外西大久保二七二
●石井禎司(三八政) 市外巢鴨村宮仲二二六八
●木塚常三(三二英政) 朝鮮京城竹添町二ノ一八九番地

●黒谷正孝(4政) 四谷區大番町十九松本方
●室井平藏(二四政) 小石川區表町一〇九
●若林亮助(三九政) 大阪市南區長堀橋筋一ノ二
●三若林工業事務所
●町田三郎(2大政) 埼玉縣入間郡勝呂村石井

●瀧 國雄(6政) 栃木縣安蘇郡野上村長谷場
●堀尾春雄(5大政) 名古屋市東區布池町五
●伊豆富人(4政) 本郷區東片町九七
●島津久賢(三九政) 麻布區霞町二二

●錦織 信(5政) 千葉縣安房郡神戶村佐野
●谷口 卓(四五政) 市外戸塚町二三二南木方
●奥村六郎(四五政) 兵庫縣武庫郡魚崎町
●加藤景福(5大政) 神奈川縣小田原町荒久八四一番地

●首藤貞吉(二〇法) 德島市德島本町
●林 泰輔(三七法) 埼玉縣入間郡川越町瀨尾三二三番地
●田中小四郎(四〇法) 深川區古石場町二三番地
●吉野方
●石橋頼次郎(6大法) 芝區二本榎一ノ六二番地
●津野方

●北田 寛(5法) 日本橋區濱町三ノ一松本方
●松尾相正(二五法) 字都宮市四條町七三
●田地隆元(三五法) 小石川區水道端二ノ三二
●河野正三(三八大法) 京都市寺町通荒神口上ル東へ入ル宮垣町五九

●穴戶伊八(四五大法) 大阪市西區土佐堀三ノ二
●石川 洗(6大法) 神戸市加納町二五、八
●野村龜藏(三四行) 八月中旬までは牛込區築土八幡町二一、八月中旬後は牛込區横寺町四九

●藤本民雄(6大文) 支那青島海關内藤本鐘太郎氣付
●稻葉紹瑛(4大文) 岐阜市本郷町四丁目上松田
●小林正盛(三二文) 市外戸塚町二四三
●原口竹次郎(三八大文) 臺灣臺北南門街二丁目官舎内

●堀 敏一(6大文) 四谷區本村町四〇
●三井豐興(3大文) 福島縣信夫郡渡利村
●石井 壽(四一大文) 牛込區喜久井町二一

●朝河貫一(二八文) 下谷區茅町二ノ五佐藤方
●岩永武道(四〇大文) 長崎市下西山町三三
●下川 惇(三四文) 下谷區下根岸町八四
●佐羽尾伊佐美(四五大文) 福井市清川上町四七

●渡利彌生(4大文) 本郷區林町六(新時代記者)
●小金龜次郎(三三文) 市外代々木山谷一二五
●奥中孝三(四五大文) 府下南品川淺間臺一四六七番地
●田中 純(4大文) 小石川區小日向水道町四二

●稻松喜一郎(7大商) 鹿兒島市山下町二〇
●中村勝正(7大商) 牛込區鶴卷町四四〇小林方
●奥谷庄治(7大商) 本所區向島須崎町一三八鈴木福松方
●諸戶一(7大商) 三重縣桑名町大一九
●石倉捨藏(7大商) 大阪市南區西關谷町七七八

●井汲成也方
●小林謙二(7大商) 朝鮮元山府本町三ノ一九
●中川 豐(7大商) 支那上海老靶子路第二〇號
●日清汽船株式會社宅内
●松井 幹(7大商) 牛込區原町二ノ二九金子方

●寺岡 素(6大商) 市外戸塚町字諏訪六六
●海野幸保(6大商) 神戸市大日通二ノ一〇
●小久江眞雄(四一大商) 牛込區矢來町四ノ一七
●有田朝一(四三大商) 大阪市北區櫻ノ宮

●後藤光和(7大商) 大分市白銀町
●玉川純一(四三大商) 下谷區谷中阪町三一潜龍館内
●中野傳三郎(四二大商) 本郷區駒込神明町三四

●鳴原 定(四五大商) 麴町區土手三番町二〇
●大崎喜八郎(四五大商) 府下巢鴨町一八七五
●岡田玄三(四二大商) 兵庫縣武庫郡住吉村

●齋藤 武(3大商) 千葉縣千葉町寒川一四三三
●小澤哲夫(四五大商) 愛媛縣喜多郡出海村三葉
●續業株式會社金山嶺山社宅内
●金子吉之助(四五大商) 京橋區銀座一ノ二〇皆

- 川勤一耶方
- 山崎久作(6大商) 下谷區谷中真島町一番地四
- 號岡崎林子方
- 松井覺三郎(四五大商) 牛込區喜久井町二〇
- 松原淳太郎(四四大商) 大阪府西成郡玉出町一〇一四
- 小田勝次(6大商) 大阪府西成郡玉出町字東濱田一〇一四
- 新郷六三(四五大商) 兵庫縣武庫郡西郷町大石十五番地ノ三
- 菅沼三彦(四三大商) 大阪市東區東平野町二ノ四六
- 河部春雄(4大商) 淺草區駒形町三
- 黒宮五朗(3理工) 朝鮮忠清南道江景北町一一四番地
- 三宅當時(6理工) 市外高田村雜司ヶ谷龜原一
- 細井辰雄(6理工) 本郷區丸山福山町二一
- 小山照雄(4理工) 京都府紀伊郡深草村字瓦町一三番地
- 石井昭資(6理工) 市外中證谷七〇〇伊藤方
- 田中 篤(5理工) 鳥取縣米子町尾高町板井已代治方
- 平川三郎(6理工) 牛込區早稲田鶴卷町三〇八
- 牛島寅生(4理工) 芝區汐留鐵道院第五十七號
- 宜舍内
- 藤原忠次(6理工) 京都府深草村字西出二〇
- 藤井 信(4理工) 府下瀧ノ川町字中里二六二
- 岸太右衛門方
- 山本敏徳(4理工) 福岡縣八幡市高見町八丁目
- 製鐵所官舎第一七〇號
- 熊谷 勝(四〇國) 大阪府北那高石町大字今在家八七四
- 向後順一郎(三六國) 小石川區關口町一九九
- 笠井勝勇(3數) 市外巢鴨宮仲二四九一
- 富田駒吉(四一英) 千葉縣安房郡西碑村

改姓名

校友諸氏の改姓名左の如し。

- 小出範治郎(4推) 本郷區森川町一番地新坂四二八
- 高山郁平(5推) 府下千駄ヶ谷町八五三
- 三田村長十郎(四二推) 大阪府東成郡天王寺村字天子子六五〇
- 林 尙夫(4大政) 舊姓西尾(鳥取縣氣高郡美穂村大字向國安)
- 廣瀬光顯(4政) 舊名由太郎(淺草區壽町五一番地瀧方)
- 上川季吉(三二法) 舊姓廣田(橫濱市青木町一八瓦斯局出張所内)
- 岩崎清美(四〇大文) 舊姓橋都(伊那電車軌道株式會社勤務長野縣伊那郡飯田町)
- 越川福太郎(四五理工) 舊姓及川
- 明治二十五年 邦語政治科出身 岡崎 豐
- 明治三十九年 大學部政治經濟學科出身 安村 良公
- 明治三十三年 邦語政治科出身 釋 政次
- 明治四十一年 專門部政治經濟科出身 高橋 一郎
- 大正五年 大學部商科出身 近藤 久視
- 大正五年 大學部理工科出身 河野 功
- 大正三年 推選校友 作田 義人
- 明治三十七年 史學及英文學科出身 中野 献夫

大正七年度校友會維持費 釀出人名 (第二回)

一金貳圓宛

高木 直亮	藤田 若水	皆川 重義	田邊文三郎	西村髮太郎	佐藤 千鶴
竹之内文雄	森保助三郎	末田 俣雄	水島彦一郎	柴戶盛二郎	矢橋 俊一
山崎 三郎	望月 謹彌	楠田斧三郎	前川宗治郎	中田 正輔	河田 正澄
吉田 兼吉	増本敏三郎	青木 郁三	赤木 勇才	和田 巖	辰巳善三郎
柴田 愛藏	永田 嘉市	今井 孝	山下 正一	加納鶴次郎	西岡 重義
伊野部恒吉	大山 利一	山本 五郎	山崎豐太郎	伊藤 與一	野田市三郎
岩本 筆藏	木村元三郎	山田金次郎	宮下春一郎	岩崎 精次	矢倉岩次郎
井上孝次郎	小野 駿一	味岡 昇三	尹 弘 燮	大貫勲次郎	泉 春太郎
松本 新六	邊 光鶴	木塚 常三	入江 悦造	中村造酒彌	山内 舜助
板井吉次郎	中谷 重松	林 潤藏	香川 禎三	水留 元吉	吉田 信彦
八木 豪	大谷 元忠	中村 實	溝口 伴六	矢部 規矩	徳原 寛一
松川駒次郎	岡崎 賢次	磯見 連	佐伯 仲藏	室伏光太郎	奥 忠彦
橋本 善助	高須 三雄	辻畑 重俊	玉田新太郎	吉崎 實雄	西尾 謙吉
五十嵐建吉	藤代吉太郎	辻畑 政市	有田 温三	堀野 眞一	鶴田 恒雄
松井 美	關口 泰輔	吉田武治郎	中山 榮一	眞船 泰介	下斗米耕造
伊藤 成章	片桐綱三郎	彦阪 矩雄	津島 廣吉	山本 克己	神田 靜治
南浮 智成	下牧長次郎	木村 直交	伊藤 雅甫	間山 清麿	北山 一郎
工藤 秀宗	小島佐之次郎	石田 眞一	赤阪 成允	三上 傑男	川島 守一
中村 篤	後藤 連平	平田又次郎	石田數太郎	佐藤 啓	鈴木與十郎
牧山 耕藏	申 錫 雨	片倉 太志	片岡 政保	赤羽 柳吉	杉浦 義泰
上片平直輔	細野 長盛	中村 明	西村 常松	轟 盛孝	川村 浩
眞下 覺	渡邊 彰	權藤四郎介	香阪 俊亮	安念次郎左衛門	鈴木 雪平
岡内 清一	守永和三郎	大瀧林之助	福富 正喜	伴 謙一	鶴田 勇雄
木村 勇	奥田 一郎	中島 三郎	吉田 五郎	渡邊 義郎	澤田權左衛門
中垣内 輝	瓜生 卓爾	石黒 雅夫	長谷川其輔	小原 直治	地引 武
永井 本六	深堀豐太郎	中田 富男	村田奈雄一	井ノ口清文	横井元一郎
山本希代士	星場 又作	上野直治郎	長谷川敬二	荒川 謙三	徳田 武夫
奥谷字之助	服部 喜八	福富 貫二	井上 廣居	小泉 改平	坂田 弟吉
白水 勇	風見 章	黒田忠次郎	湧島 季俊	福井 朝久	島崎 眞三
太田彌一郎	津田 弘季	小野 隆平	鈴木 幹三	西井 賢英	西尾 茂重
富村 順一	吉田 義之	青木佐四郎	山崎 保	井上 亮助	伊賀 朝三
平野 恒三	雲井憲二郎	前谷 武一	新野米太郎	馬場 重藏	早川 富平
谷 市之助	松平 英	藤田又一郎	木津 郡平	貞包 靜雄	足立 猛
福永 喜八	植田 實	星崎敬次郎	千田 精一	手島楳三郎	小山晴一郎
桑野 健治	山内 政市	並木 敏			

荒瀨 順藏	植村 敏樹	今村 實	宮井 章景	增田 讓	金子 謙	野村 甚作	村上 友人	岸川 善壽	石原經太郎	松岡 壽八	酒井 登	劉明 哲	本間清一郎	廣田 義彰	島崎隆三郎	山口 襲平	藤田進一郎	東 作兵衛	橋本彌吉郎	久野 三止	神立 越	池内 俊治	渡邊 秀二	季相 武	大歳 正雄	田中 豐文	遠藤 寛	安原亮三郎	萩野 榮藏	三田 幸司	新開秋三郎	安藤 宗隆	熊谷彌之助	早川 哲	
田名部孝太郎	舌間 茂世	野口 爲義	山本多三郎	川井信次郎	安間 謙	新野伊三郎	水川 靜一	奥村 茂敏	加藤 重之	深川 谷助	松倉照三郎	阿由葉市藏	本田 正	蔡 國 珍	德地 清三	深川 彌作	大久保茂七郎	片山 誠三	松本路太郎	關口直太郎	原 米作	吉井 厚	庄司 永成	高橋 謹爾	田中 直一	和久田 清	櫻井爲十郎	大松 藤吉	小西 秀三	長島律太郎	田邊 富繁	木村 曹一	芝池 忠雄	和泉 文三	
小路 春夫	平野 貞吉	山路 重永	伊藤寅治郎	田村 兵司	田中 恒美	西屋簡次郎	大槻不二雄	宇都宮虎二	野田 正昇	野竹 麒六	小野得一郎	浦神 重雄	鈴木 誠一	山田龜右衛門	大庭彦六郎	利光孫太郎	竹之下英三	吉村 貞義	橋本 英夫	守屋 孝	河島 憲一	吉年宗兵衛	松村 正治	武富禮太郎	鈴木才治郎	鞍谷 清慎	福島 幸治	神邊 昂太	山田 董平	堤 庄三	山下 龜次	永田孫千代	宮崎 重助	牧田平太郎	
辰巳平一郎	矢田部三四	田邊幸太郎	甲斐 精一	大久保 轍	大脇鏡三郎	伊藤 昇	櫻井 好雄	三井 莊一	山地寅太郎	白井實樹太	武嶋 祐吉	村上 巧兒	宇山 惣松	田村 近藏	山崎 啓三	野口藏之助	三輪芳三郎	杉本 昇	小澤 正人	矢口 義	佐倉郡一郎	桑田正之助	宮本 眞月	寛 傳	民部 照光	佐藤 鐵郎	横溝 董一	小柳 覺	齋藤 民治	並河 正一	塚本熊次郎	加藤宗太郎	宮澤 實周	池上仙二郎	
新津 準太	深澤 正彦	櫻井 銈彦	湯谷 基次	濱田 敬吾	山下 芳三	道盛龜之助	櫻村益之助	佐藤德一郎	小林 定脩	川村 充三	齋藤 秀雄	上野 豊雄	渡會 慎也	佐々木常雄	中林邦之助	栗原 喜一	北澤茂一郎	飯岡正次郎	野村 友藏	本間左治郎	大森 純一	赤津亮次郎	田中英太郎	小柳 精藏	毛利 茂	佐々木健太郎	眞藤 虎一	西井 三郎	中川 靜	中里 眞清	山添幸右衛門	青山 稔	尾留川新一郎	佐藤 金次	
新津 隆一	遠間 富平	渡邊 啓太	樋口 慶次	日野 威	若海 綠	野村 龍一	阿部 元吉	柳田 保三	丸宮 重太	宇野清一郎	大島豊之助	杉田 城平	日下 武近	田島 誠一	西村 清策	岸川 徳一	澁谷三右衛門	小澤 孝三	畑 市之亮	田卷三郎兵衛	阿波喜太郎	笹内 重晴	沼尻柳四郎	松田 毅	田島 弘男	荒井 武治	橋本 廣人	石田 梅吉	難波 英人	畑 重三	杉浦 武夫	松原 九郎	飯島 正一		
大沼 吉平	鯉淵 豊貞	伊藤 忠謙	竹本 正樂	波多野林一	井上 隆一	村上 廷太	中村賢之助	江原 節	山宮 鼎	平野 文七	眞鍋 宗六	長柄 行全	堀本美之作	富田 玄吉	宮武 省三	井上 晋	諸遊 康英	山本八三郎	清水 巖	鳥取爲三郎	砂川 一平	内野 徳三	麻植鹿太郎	安藤 文祐	三浦 安藏	三浦 經太	今村平次郎	杉浦謙次郎	前田雄之助	伊藤 定一	佐藤 自共	田中 榮重	前田孫兵衛	中島好太郎	
藤井 恕亮	小原與一郎	上野 秀麿	一瀬 義人	高戸常太郎	野村勘左衛門	山田 專次	今井悦太郎	川村 直成	太田 茂雄	宮井 正一	谷本 義榮	川上淳一郎	三村 玄綱	井上 豊之	鈴木雪太郎	細越 省一	井上 昇	地主三之丞	矢内 清次	仲山藤一郎	富澤 充	田部種之助	朝倉 博	伊野部重明	和田悌四郎	淵藤 義三	猪瀬 順	山口 民策	高木 幸三	名久井石麿	吉中 永述	米澤徳次郎	森 卓郎	前田三右衛門	矢島朋之丞
柳澤 憲一	白木 弓弦	西岡伊兵衛	飯塚 彌平	徳永 喜一	河原林禮一郎	恒川 吉毅	尾越光治郎	佐藤庄一郎	杵淵 義房	喜田 憲男	松井 宗七	敦賀清三郎	木谷 辰己	島田 政治	折原信一郎	高橋 嘉重	久保田 清	熊己 義憲	田淵 國夫	島澤 一	石神 尙二	深井 貞亮	山田 慶治	林 癸未夫	清水 信一	佐藤 長藏	菅田 祐吉	島田治七郎	千葉寅之助	高木千次郎	佐藤 善太	釜田 進一	米本 多七	前田三右衛門	矢島朋之丞
服部 正明	伊勢田嘉一	山口 經雄	峰岸 吉二	勝田友三郎	原 正幸	中路 新吾	小川愛二郎	等々力正保	井本 滿助	原田 次助	神崎 義俱	久保 富太	本間 信吉	小杉 徳	太田 保	田阪 千助	谷口 邁	根本 辰治	丹澤 美助	山本 市英	清水 三郎	岩瀬 純一	佐藤 四郎	内藤 暉義	野本 博章	戸川 多助	花香 伯貫	千代田惠三郎	米田 勝造	大江 善一	尾崎長太郎	長峰龜太郎	原田駒之助	古橋錦太郎	
米澤 龜次	塚本金次郎	刀彌 勘三	佐俣宗三郎	原田 友輔	松尾 長市	中村朝次郎	山田嘉右衛門	村田重治郎	西 三郎	春成 香蓮	河田 隆平	山田 忠吾	田付禎太郎	宮原 友記	福代覺三郎	小林 悌	堺田錦十郎	米原 章三	生方 甚作	中村 純平	榎本 三郎	岩瀬 有一	新井 次郎	家本 爲一	久保源九郎	森安綱太郎	鍋島 八郎	丸島 敬	廣野 猛逸	小菅 秀直	大森慶治郎	貴田信太郎	青木濱之助	松井 周次	
水品 昌治	戸田循一郎	重信雄三郎	石本 三雄	本多 親宗	田中誠之助	木本圭一郎	等々力治郎	北條 勘一	谷川 宣智	井上 忠男	白髭武三治	松田 谷三	小林 徳重	山田 鶴三	高垣 光藏	奈原與惣八	佐藤 雅信	渡邊 周助	永瀨 務	浦田 恒徳	島山 鴻業	酒井 萬馬	益子 伊輔	淺本 徳三	右田 顯道	香取 吉萬	赤木 一雄	野澤傳一郎	山口藤次郎	山口市之助	横川 重次	新里藤一郎	西原 政太	遠藤 剛三	

鈴木 健三	大橋 芝妙	久具 爲良
近藤 壽穂	中谷 篤三	吉田未知一
高橋宇三郎	島川 進	土井 權大
古川勝次郎	犬伏 節輔	坂本 信道
阪田 久彌	川瀬 義雄	宮崎 篤臣
山本篤一郎	村瀬 李麿	柏木 銳男
阪木 公德	小林重次郎	片岡 達吉
渡邊 嘉一	吉村 隆寛	岡田 貞治
古澤 與總	鈴木 重三	伊藤 謙次
大日方 篤	萩原 民治	飯村 俊二
伊藤 貞次	鶴見 盛征	成瀬 清
齋藤登三郎	木村辰次郎	足立 正文
江藤 清澄	酒井 正雄	三好 胖
渡邊 榮爾	板場 州宏	鈴木 良運
村松 藤太	中山誠次郎	鶴田 萬三
萩野 茂廣	小河滋次郎	阿由葉正一郎
松島 謙一	齋藤 清治	丸寶 良行
佐伯 房次	小川 忠淳	菅原英次郎
吉富靜三郎	野中 理三	古賀喜久治
今津亮三郎	山崎文五郎	大島理太郎
奥畑 房吉	岩岡 真藏	猪飼 清六
小坂橋四郎	松原 達藏	野澤悳一郎
飛山桂三郎	伊野部重彦	石津 榮熊
佐藤 芳信	西本 鐵馬	劔柄松之助
土屋 金作	久保田義三	與子田教行
鄭 寅 韶	山口 芳雄	川原 惟基
澤井爲三郎	添谷 勝馬	齋藤 廣路
小森 享三	中村 新輔	矢島 貞雄
首藤 定吉	吉田 宗徳	清水 義彰
越知 通清	奈良 岩松	柏木長太郎
岡本 俊人	深水龍太郎	片尾 廉爾
大野 退藏	松本千太郎	岡本 形吉
小峰 徳治	木村友之助	竹下清次郎
和田 正吉	西垣勤次郎	太田 一市
出野 信慶	兒島 純雄	石原 傳

風間 忠任	柴田 正	宮本 太一
金澤種次郎	柴田 貞	金光三代太郎
金光 文孝	今井 紀綱	森 敏則
山田 甫	五領田元太郎	瀧野彌太郎
松川第四郎	辻 巳之助	國領 榮一
伊藤 祐保	高梨不二雄	小松 市郎
賀集 純三	平尾 寛	三代 政市
川田 以一	鴨井 雅治	西村 象藏
大和藤兵衛	粟津 榮藏	片岡恒太郎
今野 助藏	日種 祐邦	西 豐隆
宗川 保	田村信三郎	平松 得一
小河原宗義	行田 三郎	鈴木時之助
長坂 長	小野 鼎	近藤吉太郎
鈴木 武雄	鈴木 英夫	土屋 晴
倉田 謙吉	九鬼 真次	松代安太郎
濱谷 信三	澄川 壯造	松島鈿三郎
廣神定五郎	川口 寛之	青山 一郎
青柳長次郎	大平 慎一	遠藤喜四郎
大島喜代治	小柴卯之七	峰川清次郎
村本猶太郎	岡谷喜三郎	菅谷 信一
湯尾雄次郎	青澤正太郎	實松 竹二
山下 盛澄	木幡 清風	吉崎宇右衛門
齋藤 久吉	卜部 守之	久木田 司
稻葉 惠成	片岡 鶴雄	田中 亮一
永江 浪雄	後藤 龍縁	松岡勝太郎
茨木 基忠	加納 惠吉	倉持 光壽
矢崎直治郎	本多 文雄	杉田 米吉
川上 繁治	増田 鑑亮	増田所之進
鳴海 清	片山 英作	白石 俊夫
永山 孝造	宮崎 廉	定弘 正興
有近 興隆	西郷 一司	吉水 松巖
藤井 貞一	田邊 感善	上田 卓
河村 又一	手束愛次郎	手束歌之助
野川 義章	橋本 正藏	谷口 龍
太田 長輔	得丸助太郎	笠井 美行

羽山常太郎	藤原覺三郎	岡田慶三郎
久保田 貢	與那城清信	猪熊卯三郎
關口 直諫	稻葉 良男	泉 常二郎
遠藤 周藏	小室 道郎	松村清次郎
小山鬼子三	藤田幸太郎	黒崎 玉次
鍋島秀太郎	石井 宗次	門井 東一
村井良太郎	長浦重三郎	和田喜太郎
永田善三郎	角田 宏顯	船越作一郎
土井 彌一	木内水太郎	篠崎 彌平
赤木 龜一	彌久末庄七郎	堀江 泰藏
獅子内謹一郎	國友 慶之	長屋 正志
土田 行丸	西尾 清常	足立 清逸
井上久太郎	諸橋 守之	三宮 庄司
蓬萊舜一郎	蓬萊宗兵衛	石川 正治
小幡 信	小笠原勘三郎	岩田 豊吉
川邊秀次郎	三隅 忠雄	河津 祐信
藤井 義範	野吹 實	近藤 祐吉
井上 環	笠原實太郎	後藤作次郎
灘波理一郎	新井 信平	多田 直通
水野巳太郎	佐藤 武雄	吉田 昱吉
岩佐 重一	中野 宣治	竹村 房吉
笠原 國雄	佐々木文作	依田 直吉
杉本常次郎	米谷 良三	今井 一雄
内山 廣三	三上 芳直	古橋 林司
赤田 盛一	高知尾誠吉	川村 虎雄
舟橋 仁一	藤川 要	金子 智
金築 妙峰	大内源一郎	白石 實
杉田長右衛門	小泉 清志	黒木 耕一
佐藤 茂亮	西川 玄雄	荒巻巳之助
宮田竹千代	黒澤 昇治	磯前幸次郎
和田 末雄	岩部 縣	延川 直臣
廣田久之助	佐藤猪三郎	鈴木 祥應
武谷 忠二	山口馬城次	大橋孫三郎
津田 信郷	坂垣友次郎	江木 伯助
佐藤 顯三	松田謹一郎	久米川靜一

遊佐 敬事	小島 文作	矢野賀惠次
渡邊太平治	小島 定助	行本 吉男
野上 長榮	松島 恭一	笹島 善一
森本隆太郎	山浦 武夫	海老原 健
小畑 卓郎	原 文吉	吉原 秀夫
村島 孝一	上田 左京	南 英一
布施 孝	高橋 愛作	今川 幸吉
本山 泰三	三橋四郎治	佐々木作三
齋藤 潤三	村岡 猛二	北大路季次
森川 衛爾	和田 純	尾崎彌右衛門
井上 壽晴	於勢 昇	中村 祐吉
田邊 意平	西尾 秀	坂田 成三
三角 見龍	内田賢之助	丸山 幹治
石川 盛	小野 庄一	新井 八郎
小川 勝吉	稻本元三郎	伊賀惠三郎
縣 保三	山内榮次郎	今井 鏡一
品川 勤吾	赤塚 善助	佐藤 近
後藤 清造	西岡 靜一	岩下 直人
森 治作	藤村 平信	小松 洪賢
氣比新二郎	成田 謙輔	外島 政衛
田中駒太郎	稻生龜之助	大路 讓
福井 孝也	渡邊 一雄	曾我 豊
日野 忠吾	福本清次郎	森本 謙明
藤野 崇正	馬場長一郎	河合 龍
上田 晴雄	元松 昇藏	古賀菊次郎
岸 益衛	大津 輝	豊田 轉
鹽田 敬吉	西村豊三郎	新井 宗一
染谷 忠助	西山房次郎	藤間 八藏
永野 靜夫	山崎 直治	八阪卯三郎
奥 源祿	益山 兼麿	小菅 讓作
小川 儀平	石黒大次郎	有馬 順二
春名儀太郎	朴 珥 圭	佐々木長雄
鈴木 英鎮	金子吉之助	飯田 和世
村上 知祥	須高 泰助	永田 信行
		廣橋 治郎

橋本十兵衛	高尾 察玄	曰理 宗一
安威豊三郎	東田 茂信	大村 豪光
牧田長三郎	清水 政雄	長谷川茂二
田邊 真平	上塚 眞熊	大原 寛治
澄田 澤邊	南 彦朝	若林 庸親
笠井美也男	白石 倉吉	小野 静
國分 末三	大西 通幸	小島 藏次
陣内 喜三	大浦 正三	大島 正一
本間 直	稻垣升一郎	高橋誠太郎
岡 侃	重岡 忠三	安藤 吉郎
波野平四郎	今西 忠知	吉原 光一
増淵 醇	外池達之助	星 勇平
葛城 正盛	逸木 盛照	金子 春吉
北浦 孝市	朝比奈 茂	藤井榮三郎
瀧澤 志郎	矢口 親平	藤井 卓
花田勝四郎	山本 又雄	佐野 徹治
中野恭一郎	田中 辰治	内山 慶一
土屋金太郎	野原 稻藏	小西 元
佐崎 伊八	綿田 久吾	小林重太郎
宮谷 公雄	荒城 季夫	平木 均平
橋 尙一	高橋文五郎	堀井善次郎
西澤 賢吉	京坂 重雄	山地 調
土屋 通彦	後藤五郎右衛門	岡 治逸
西江 劉	飯島佐志郎	須賀 隆賢
川村 善助	松尾 寛	武田 鼎一
永松 哲治	安藝 元忠	吉岡 新八
小出 有三	高木 常七	守隨 貞三
河瀬 文一	打田 耕一	田中 只江
高橋 浦助	綾 辰	渡邊 半吾
武本 康一	西村徳太郎	松田 麒造
山本久次郎	志手 環	野口源之助
田中 武治	直原豊四郎	國澤 照光
吉田 健二	満田 好秋	橋爪作太郎
木野 正俊	足田 直雄	室井 平藏

川久保光正	齋藤 武	廣瀬安太郎
鈴木 善作	三明 諒夫	志塚 重助
池田 文次	野末要三郎	大石菊次郎
枝吉 文種	八千 正敬	小林多平治
高柳國太郎	安部 邦吉	本田 伊平
手塚 勝吉	古川 治彌	時山 勇
伊江 朝助	石橋久太郎	田子 長三
時枝 良太	高江 幸彦	村山 悌藏
木下 洪堂	松本 文作	古賀 良雄
鹽澤 正一	富岡 義則	三輪 末彦
丸山 傳	山地竹十郎	村田利三郎
山下 眞一	師岡 秀磨	吉田 公重
葛西 民也	海原 曉雲	海渡 新七
大村 喜藏	生島 藤藏	山下覺次郎
原本吉太郎	長谷川益人	小澤 二郎
關谷金一郎	岩淵 澄夫	岩崎盛太郎
吉川 綾吉	内田竹三郎	徳本 賢一
東尾勝三		
一、金四圓也		
濱田宗三郎		
一、金參圓也		
白崎祥三郎		
一、金貳圓九拾錢也		
飯島 郁三		
一、金貳圓八拾七錢也		
富川 勇三		
一、金壹圓五拾錢宛		
田卷義平太	藤井重三郎	
一、金壹圓宛		
佐藤勝太郎	伊藤 衷章	入江 岩次
杵淵信四郎		

學生會合

雄辯會消息

▲東西學生雄辯大會 五月五日(日)正午於本校大講堂開催。早稻田の森の綠意々濃かならんとする五月の初旬、舊幹事最後の催しとして嘗て例のなかつた東西學生聯合の雄辯大會を開いた。蓋し吾人は世の所謂名士と稱へらる、年齢と鬚とで權威を添ふる演説には飽きたので、熱血逆つて青年の絶叫が聞きたかつたのだ。

- 一、開會の辭 幹事 荒木 章君
- 一、最後を論ず 専修 遠山 静吾君
- 一、労働界に於ける老年工の地位を論ず 中央 坂本 慶一君
- 一、宗祖の考察にあり 天台 山村 光敏君
- 一、世界大戦の興へたる精神的自覚 曹洞 大桃 哲龍君
- 一、雪に輝く天使の像 關西學院 村上 謙介君
- 一、聲の擲擲 國學 山崎 弘幾君
- 一、發明家の苦を訴へて諸彦の後援を待つ 農大 寛 圓藏君
- 一、眞の生活 東大 青木 得淨君
- 一、相反而立に於ける生命の價値 宗大 小林 大蔵君
- 一、現代文明の缺陷 高師 益谷 又雄君
- 一、無題 明大 關 未代策君
- 一、鯨仕止めて血糊のついた牙を洗へば 潮が鳴る 水産 小島 信司君
- 一、見よ是れ其の精なり 日蓮 富田 義將君
- 一、生活と戦争 豊山 遠藤 覺榮君
- 一、時代思潮と青年 一高 川原次吉郎君
- 一、平凡人の歡喜 同志社 行方 薫雄君
- 一、社會主義の精神を論じて日本に及ぶ 慶大 米谷 義一君

- 一、修正派社會主義の哲學的意義と 政治的價値に及ぶ 日大 加藤 宗平君
- 一、貧困論 本校 田上 友治君
- 一、國民よ汝の眼を世界に注げ 帝大 野崎 操君
- 一、宇宙の鐵則 高商 姫井 旭一君
- 一、挨拶 會長 田中 博士
- 一、閉會の辭 幹事 中村三之丞君
- 試験近くにも拘らず、聴衆は場に溢る、ばかり、而も熱心に靜肅に聴いてくれた。辯士の聲は電燈と共に赤熱した。吾人は吾人の期待の裏切られなかつたのを嬉しく思ふ。厚く遠來の客、同志社及び關西學院並に都下各大學の辯士諸君に感謝する。閉會後階下應接室で懇親會を催した。
- ▲豫饒歡迎演説會 五月十八日(土)於本校大講堂開催。四月新に自由の學園早稻田に入學せられた新入生諸君歡迎と來る七月を以つて吾等が母校を去らる、卒業生諸君の豫饒との二つを兼ねて、漸く暑くなるんとする初暑の一日本校講堂に演説會を開いた。吾人は元氣と希望に満ちた新入生諸君の獅子吼に勵まされ、將に社會に出でられんとする卒業生諸君の豊富なる經驗と懇篤なる訓へに指導せらる、ことこの多かつたことを厚く感謝する。
- 一、開會の辭 幹事 高橋圓三郎君
- 一、獅子は吾子を千仞の谷に早大は 豫科 入江 弘君
- 一、吾子を試験の谷に 豫科 石戸徳之助君
- 一、吾人人生の目的 豫政 瀧美 鐵三君
- 一、新時代建設の曙光 豫法 塚田 一甫君
- 一、先づ第一聲 豫商 長岡 健作君
- 一、人生のオシアス 豫法 太田金次郎君
- 一、向上の精神 大政 木村 盛君
- 一、送別の辭

一、去るに蒞みて

- 專政 徳山 鏡治君
- 專政 最上 勇君
- 大政 橋本 求君
- 大法 雁住 又郎君
- 專政 本間 勇吉君
- 大政 田上 友治君
- 專政 松枝 保二君
- 會長 田中 博士
- 大政 須田 斌一君

一、挨拶

- 高橋圓三郎君
- 大立目直武君
- 須田 斌一君
- 白石 一君

會終つて卒業生諸君送別の懇親會を清風亭に開く。多數校友諸君も來會せられ、頗る賑かだつた。本學年度最後の懇親會のとして話は盡きぬ。散會したのは九時過ぎ。電車道に出ると江戸川の流も今日のみは清く澄むで見えた。終りに卒業生諸君が在學中吾が雄辯會の爲に獻身的に奮闘努力せられ、今日の發展を來されたことを感謝し、尙今後の御指導を願ふて止まぬ。(大立目報)

●早稻田英語會報告

英語會は此新學期に於いて六拾餘名の新會員を迎へた。それで第一に幹事の改選を行ひ、第二に室内の設備を整へ、そして第三に社交會を開いて、益々我會の使命に向つて努力し且つ發展を期して居る。

(一)幹事改選 例年九月に改選を行つて、四月に大會を行ふ事になつて居るのだが、學制改革の爲め、今年からは大會を秋季に延ば

し、幹事改選を今度行ふ事になつたのである。そして其結果として、左の如き新幹事の顔振が五月六日に決定された。

- 本科一年山田君、田邊君(以上再選)、大屋君、土橋君、(以上新任)、豫科二年前田君、佐原君、工藤君(以上新任)。

尙ほ舊幹事一同は、秋季の大會迄共に責を負ふ事になつて、我會の基礎は益々堅いものにならねばおかぬであらう。

(二)室内の設備 我會は一番名譽ある歴史を有して居るだけそれだけ、他の會に比して、より完全な會室を有して居るのであるが、今度は新たに又、大テーブル一脚、ベンチ四脚、講師用アームチェア一脚を加へて、室内の設備は殆んど完整し、又優美なものになつた。殊にアームチェアは立派なものである。始めてミセス北島がそれに腰掛けられた時であつた。誰やらが、『玉座に於けるクインヴィクトリア……』と云つて喝采を得たが、全くそれは立派なものである。かうして我會の室は、氣持の好い、そして懐かしい雰圍氣に包まれて慈母の懐のそのやうに、二百數十の會員を育んで居る。

(三)社交會 五月十三日(月曜)の午後一時から友愛學舎のホールで開かれた。此會は色々な意味を含んだものであつた。先づ第一は新入會員諸君歓迎である。それから第二は舊幹事小林孫一君がペンシルバニア大學に留學される爲め、來る七月渡米されるので、その送別の爲めである。そして新幹事の顔見世と云ふ事を第三に加ふべきであるかも知れない。

兎も角かうした色々な意味を社交と云ふ言葉

で表した會であつた。月曜日であり、天候も頗る怪しかつたにもか、はらず、來會者は中々多く、盛會と云ふ語を冠する事が出来る程のものであつた。

山田幹事の開會の辭、由上舊幹事の小林君送別の辭があつて、小林君の挨拶があつた。小林君は獨特の雄辯で『英語で御挨拶を申上げるが本當だが、英語は頗る下手で、其れ故習ひに行くのだから、何づれ歸つたら其時こそ……』など、謙遜されて、留學の目的を細かに語られた。それが終つて、速水舊幹事の新幹事紹介があり、二三會員のスピーチがあつて、さて一同はサイダーを抜いた。先づ小林君の爲めに乾杯し、我會の前途を祝して、それから各自の身上話となつた。此時は先程謙遜された小林君も、流る、やうな見事な英語で、ニツクネームの『孫ちゃん』迄披露に及んで一同を笑はせた。かうして自己紹介が一

渡り済んだ頃は、もう四時を過ぎて居たが、それから銘々の隱藝に移るのであつた。オーケストラあり、落語あり、痛快劇あり、儲も盛なる事や……と云つた所である。特に當日の收獲は、ベニングホフ先生御自身蓄音器を携へられて、我等一同の爲め、得難き聞き難きレコードを、數多聞かせて下さつた事であつた。改めて此處に感謝の意を表せねばならぬ。一同が先生の此の賜物を家苞に、歡樂のつどひを解いたのは、永い初夏の日の、早くも暮れか、る薄暗のヴェールが、友愛學舎の遠近に掛つた時であつた。(土橋報)

●高等師範部大會

五月十一日、卒業生の豫饒と新入生の歓迎とを兼ねて高等師範部大會を開催した。會場は

大隈侯爵邸のところ、本年は雨天の爲め八千代俱樂部に變更した。午前九時開會。次のやうな順序で進行した。

- 一、開會之辭 英二 西田君
- 二、教育會に起れる一問題 平沼 理事
- 三、中等教員時代の思ひ出 北 教授
- 四、教育者の覺悟 中島 部長
- 五、教育者は樂観して力めよ 内ヶ崎 理事

- 六、偶 感 國豫 功力君
- 七、所 感 英豫 寺内君
- 八、思ひ出づるまゝ 國一 加藤君
- 九、獅子吼 國二 田所君
- 十、同 想 英三 長坂君
- 十一、謝 辭 國三 青木君
- 十二、感 想 二部 松本君

- 茶 菓
- 十三、餘興歌番 筑前琵琶 講談 薩摩琵琶
- 十四、閉會之辭 國二 尾原君
- 十五、校歌及萬歳三唱

平沼理事講演の概略を記すと、『帝國教育會に出た一問題……會の内容は秘密を守るべし。』との事であるから口外しない。(との冒頭に)教員待遇問題について先生一流の皮肉味を交へて良教員の少ないのを社會の罪と教師自身の罪との二方から論じて、最後に、卒業生と新入生とに對して、一鞭を加へられた。次に北教授は赤裸々に自身の中學教員の經歷談を述べ、最後に、卒業後五年間は馬車馬的に研究に向つて突進せよ、中學教師は完全なる政治的才能あれ、劣等生不品行生にはより多くの同情を以て接せよ。中學教師は田舎の中學に眞の愉快が存してゐる。半農生活をなせ、と云ふ意味の訓辭を述べ、エマーソンの汝の境

遇を頂點とせよとの警句にて結ばれた。
中島部長は中學校に於ける學閥を説いて、やがては官、私の區別をつけたいやうになるであらう。それについては諸君の自研究を要する旨を説き教育者は被教育者に自己を實現せよと戒め、昨年から本年にかけて教員の需要が多くなつたが、それは戦亂の影響によつて、實業方面へのみ人心が向つた爲めであらうと結ばれた。

内ヶ崎理事は例の諧謔を交へて、高等師範部入學者の減少の理由を、現代の實業方面にのみ走る流行病の結果であることを述べ、實業方面に走る結果は、其の反動として、今より志す人が卒業する頃は其の熱の下火の時であらう。それに引きかへて、今、師範部に入つた人は先見の明のあるわけだ。教育者は物質上の収入は比較的少ないが、精神的収入は恐らく教育者の上に出づるものはないだらうとの意味で聽者を喜ばせられた。學生諸君の演説も振つたが紙面に限りあるから割愛する。餘興數番に快をつくし、校歌を高唱、中島部長の發聲にて萬歳三唱、解散した。時は、薄暮：春雨はシト／＼と情愛の發散を防ぎ、情愛の結合を表象してゐるやうに感ぜられた。

(在文貴土生)

●高等師範部第二部の横須賀見學 五月二十四日横須賀地方へ見學旅行をなす。昨夜來蒸し暑い雲が雨さへ誘つたにもか、はらず大部分會合したのは愉快であつた。車中獨りて喜んだり人を喜ばしたりする丁と〇との帽子が異彩を放つ。横須賀驛へ着いたのは十時頃であつた。〇の親父である横須賀市長奥宮少將

を市役所に訪ひ、その紹介で海軍工廠及軍艦棟名を觀る。午後特別仕立ての海軍工廠のモーターボートで海路追濱飛行場へ向ふ。稍高まつて來た浪はボートを弄ぶ。その度に歡聲があがる。

飛行機母艦若宮丸の甲板上に二臺の飛行機の搭載されてゐるのがまづ吾々を喜ばす。追濱には三十五臺の飛行機が綺麗に手入れされてゐる。此所でも相變らず丁寧な説明を聞いて三時引き上げその夜は奥宮少將邸に宿る。二十五日早朝鎌倉に向ひ、源家九百年前の古跡を訪ね、長谷を経て雨に煙つた江の島に遊び午後七時半歸京す。

旅行中一方ならぬ便宜をはかつて呉られた奥宮少將、海軍工廠の野崎大佐、棟名の横山大尉に深甚なる感謝の意を表す。

●早稻田史學會例會 六月十五日午後一時よ恩賜館内讀書室内に於て開催。折柄三年生試験中にて出席なかりしかども、清水講師渡支送別會を兼ねし事として、會員多數の出席あり。石村君の「契丹國號考」の孝證發表は初試みながら頗る面白く、之れに次ぎて津田講師の「感想談」あり。後小田内講師の「武蔵野の郊外」と題する講演は寫眞等多くの材料につきて説明詳密を極む。先生は目下此の方面につき専心調査考究中の由にて、近く此れが結果を公に發表せらるゝとの事なり。終りて清水講師渡支送別會に移りたるが、同講師の渡支は東洋史研究の爲めに、席上煙山教授の送別辭あり。之れに對して清水氏の挨拶あり。後茶菓饗應の裡に一同談笑に時を移して散會せり。(幹事和田生)

常日の出席者左の如し。

- 大味金五郎 煙山專太郎 西村 眞次
- 津田左右吉 小田内通敏 飛澤 勇造
- 高橋源一郎 藤本 慶祐 砂川 一平
- 齋藤 保次 定金右源次 樋口 清策
- 蘆田 伊八 關 與三郎 上澤 三郎

此外學生八人

●早建會六月例會 理工科建築學科卒業生よりなる同會は、今回同科教授内藤多仲氏米國見學視察より歸朝せられたるを迎へて、四つ谷三河屋に歡迎會を開く。第一回より第五回に至る同科在京卒業生四十五名中三十七名の出席者あり。午後七時開會。席上内藤教授滯米一年有半中の感想並に滑稽なる失敗談あり。後更に主客談話數刻、散會せるは十一時なりき。(幹事大澤一郎)

●告工業政策科並に舊像K組諸君 先に故岸作太郎君の爲め香料募集せしに卒業試験中にも拘はらず續々御禮出被下發起人たる小生深く、諸君の御同情を感謝罷在候、全部の金子を纏め四月十日小生は親しく富山市神通町なる岸家を訪れ、母君に甲辭を述べ、靈前に香料を捧げ申候母君には小生の容姿を打眺め涙に咽びつつ、岸君の在りし日を物語られ共に袖を濡らし申候、岸君は明治四十四年富山中學卒業後暫時家事に従事致され、大正三年春早稻田大學商科に入學せられ、成績も佳、性質温順、研究心深く、努力の人にして、臨終猶ほ學事を思ふて止まず、傍らの家人に袖を絞らせたる由に御座候、思へば去る三月五日、病魔を杖に託して、登校せられし容姿の痛ましき、今も猶ほ髣髴として眼前を去らす候。

嗚呼我が懐かしき岸作太郎君は遂に三月廿日他界せられ申候、死は實にnothingにて、生は宛に角sanchingに御座候、思へば遺憾に不堪候、我々級友勤勉努力、岸君の死をなして有意義ならしめざる不

可と存候、尚諸君より贈出の金額は左の如くに御座候。

- 工業政策科有志 貳圓拾錢也
- 舊像科K組有志 壹圓四拾錢也

二仲、越えて四月十三日岸君の兄君富山の拙宅を訪れ篤く諸君の御同情を感謝せられ候、一々御禮申述る筈に候へ共紙上を借りて有志諸君に御禮申くれとの事に御座候間左様御承知被下度候敬具

(七、五、四工業政策科三浦生記)

●六機會消息 五月三日(金曜日)第二回例會舉行。晩春の陽をあびながら、中野驛で電車からはきだされたN組二年の一行は田圃と松の古木の間を面白い話に歩をはこばせて青梅街道をすすむ。遠足會には好適の日和だ。杉の並木の杉並村も涼しい氣持に過ぎて吉祥寺から幽邃な井の頭にでる。疲れ加減もい具合。ここで休憩して一同記念の撮影をする。左記四十七名の來會者があつた。

- 弓氣田 進 藤井 誠一 小野寺喜吉
- 原 信男 久野 政一 小松原壽次
- 松原 泉 中根 正一 佐々木武夫
- 澁谷 勇 松本 浩二 佐々木勝治
- 木村 緑 和田 戒三 岡田龜之助
- 山形 喬 青島 雄雄 中井純一郎
- 三村 登 小暮 文雄 富部寅五郎
- 阪本 安 清水 善雄 三宅文武郎
- 瀧口 泰 山本 倍夫 箕田 一郎
- 藤本 憲吉 大橋 數馬 小川 二郎
- 岡部 憲吉 岡庭 秀治 志村 三郎
- 森岡 眞篤 中垣 一男 平野 五郎
- 相浦 英六 關谷 正策 井上 友造
- 刈谷 忠篤 田中 善治 西岡 義也
- 平田 重徳 岡島 正倫 福田 耕
- 丹羽 成徳 笠尾 五郎(順序不同)

自由行動で公園の中をいくつかのグループになつて散歩する。神田上水の源であつたといふ池は今は深く澄んで、蒲葦などが青く繁つてゐる。建久八年に源頼朝が創建したとの傳説の辨財天と、こもり茂つた杉の森は神祕のささやきをして都はなれた若人の心を仙境につれてゆく様に思はれた。午後三時半から井の頭公園富美屋の二階で懇親會をひらく。氣焔をあける者、歌ふ者、東西に別れて腕角力する者、そして最後に一同「都の西北」を高唱して夕やみのうちに解散した。

(大正七、五、三、稿、阪本安、報)

●早稲田道の會復興

早稲田の秀才にして雄辯會に其人ありと唄はれし故松枝徳磨君が設立せし早稲田道の會は同氏没後久しく中絶せしが、今回松村介石先生指導の下に之を復興するの機を得、落花梢に老い新緑滴らんとする四月廿日大講堂に於て復興講演會開催せり。劈頭、平沼先生「名實論」題して、世間滔々として名のみに驅られ實の是に伴はざるを嘆じ、諄々として道を説き、次に大川周明氏「日本帝國と宗教」の題下に東西先哲の思想を縷述して國家主義を高調するは眞人格の完成にありと國家主義を高調し、野口復堂氏「亡國の宗教」と題して、實際を以て詳述し、次に松村先生「革命時代の題下に列國の時局趨勢を宗教的に觀察し、神の大裁判の下に的確に列國の運命を豫言して日本國民の自覺を促し、新時代はイエス、釋迦やバイブル等に拘泥すべき時にあらず、イエスマ人なり吾亦人なりと壇上に眞宗教を獅子

吼せられし其の熱烈なる態度風姿は宛として往年保羅の出現を現はしめき。五時閉會。

(幹事報)

●秋海會、ラスキン著「橄欖の冠」は、北澤先生の熱心なる御教導の下に五月二日を以て目出度その研究を終了した。英國一流の文豪が説く所の勞働問題或は戰爭觀の如きその主張の純な眞面目なる點は吾々の共鳴する所であつた。吾等が先生の御宅にて若い血を躍らせながらラスキンを論じ合ふ時、吾等は親にも増した先生の御慈愛に對し唯、感激して措く所を知らないのである。然かも會員相互の兄弟にも増した親密さと研究心の彌やが上にも大なるに至つては是れ亦先生あればこそ心の底から感謝の念に打たれるのである。

九月より引續き英國の有名なる「ホップハウス」著「レーパームーブメント」を研究する事に決定し名残りを惜みつつ商一讀書會は閉會された。其翌五月三日午後六時より神田今文に於てラスキン讀破を祝ひ且會員相互の親密を計らんとして懇親會を開催す。北澤先生はカツキリ六時に御出になつたが、未だ會員全部の出席がないので六時半閉會す。日本人の缺點なる時間に對する感念の不正確なる事は此の會に於てもどうする事も出来なかつたが、一滴の酒も用ひなかつた事はいささか甘黨の痛快とする所であつた。先生を取りまいて吾等十五人の兄弟はホントウに打ち解けて語り合つた。先生の面白いアメリカ生活を承つた後、吾等は言ひ合せた様に言葉を出さなかつた。先生曰く「まるでビュリクタン集ひの様だ。諸君はやはりラスキン黨だね。」

そこで吾等は思ひ出した様に急に校歌を唱つて元氣を振ひ起し、各自得意の餘興に時の経つのも知らなかつた。午後十時再會の時を約して散會した。當日の出席諸氏左の通り。

(高田投)

- 北澤 先生 岡崎 誠一 田中益太郎
- 山口 新吉 増水 昇 中上 英雄
- 信國 鶴介 井上 成意 木下 清雄
- 横田 茂 竹内 正男 水野 憲次
- 坂本 財地 横田 真治 高田 義雄

●早稲田鷄聲會報告 早稲田鷄聲會は三月廿日(水曜日)午後五時から、府下堀之内大葛に其豫踐會を開いた。朝から吹き荒んだ烈風に、彼岸三日目の今日も極寒の感があつたが、會する者は三宅助教を始めて二十名の多きに達した。

今年度十四名の卒業生諸君の中、理電大井哲夫君、同村山茂君、商永井寛君、同渡邊富美雄君、高師浮田秀正君、専正長谷敬止君、商鈴木喜一君、には席上賀詞に添へて紀念品としてサツク入水晶印材一個づつを呈し、母校京北中學校より寄贈の校友會雜誌を一同に分つて、さて晚餐の饌に就いた。風は強いけれども室内には通はず、寒氣はかなり烈しいけれども多数火を圍んだ此の室には感じない。さうして一杯の酒は、輝く久遠の理想に進む青年の血潮をそるに充分である。盛に談し、盛に笑ひ、黄塵の街衢離れた此地に、一閃は充分の歡を盡した。一同が上氣した頬を、反つて心よい寒風にさらした時、それはもう十時を過ぎてかなりの頃であつた。上弦の月は西の空低くか、つて一同の影は東に長く伸びて居た。

此日我會は、佐久間、清水兩先生を顧問に、三宅助教を會長に推戴することを決議した。(土橋報)

又五月十一日中野堀之内葛屋に於て、新人生牛歡迎會を開いた。皆が集まつたのは晩春の香そこはかとなく匂ふかはたれ時であつた。先づ宿のさつぱりしたお湯に入つたりして、大井君が開會の辭を兼ね歡迎の辭を述べられたのは七時頃であつた。新しい人が多いため各人夫々名乗合ひ、次に新たに幹事選舉があつた。それが終ると皆打ち寛いで飲むものは飲み、食ふものは食ひ、互ひに胸襟を開いて話し合つた。お話上手のN君はいつも人氣ものである。そのうちT君が唄つたのを始めとして、薩摩琵琶、唱歌、はてはS君獨特のデカンショまで、ほんとに近頃になき痛快の數刻を送つた。

二つの母校の校歌を唄ひ、早稲田鷄聲會萬歳を三唱し、閉會したのは十時すぐる頃であつた。外はほのかなる星月夜にて夢穂渡る風心地よく我々が歸る野路の兩側には五月の蛙が鳴き交してゐた。當日の來會者諸君は

(ABC順)

- 三宅當時先生、金澤廣治君、松本浩二君、中村元一君、大井順一君、大里五郎君、大山廣光君、佐原忠雄君、阪本安君、世良貫一君、下竹房敬君、竹中重雄君、田中俊雄君、土橋敬英君、であつて、幹事改選の結果、
- 法科田中俊雄君、商科佐原忠雄君、中村元一君、河村春雄君、世良貫一君、理工科阪本安君、松本浩二君、鶴崎重文君、文科土橋敬英君、大山廣光君。

以上十名の諸君が其の任に當る事になつた。

(大山生記)

●群馬縣人會 同會は五月五日遠藤博士宅に於て、卒業生豫饗、新入生歓迎を兼て、春季大會を催した。時は新緑の五月、火と燃ゆる躑躅に圍繞された庭園の廣場に設けられた大天幕の裡には同郷同窓の青年會集する者凡そ八十名。開會に先ちて一同は庭園の躑躅、博士の書齋、易學講堂を參觀した。定刻午後一時、博士、博士夫人、玉井先生、岡田和四郎氏着席の上、プログレッツは幹事小林初三郎の開會辭に始り、博士、玉井先生、岡田和四郎氏の有益なる講演卒業生富井君の謝辭を経て、餘興に移つた。珍奇絶妙なる福引と會員の蔭し藝とは會員一同の臍を捻らせた。其間甘黨は、しるこ、おでん、すしに仕出人を忙殺せしめ、左黨は氣焔萬丈麥酒の滿を引いて、白熱した盛宴は春陽の夫よりも尙壯美を極めた。折から天も亦此の爛漫たる會合に共鳴してか雷神の樂を奏して歡興に和し、紫電と驟雨とを以て會合の印象を一層深からしめた。かくて快聲朗々『都の西北』を合唱し、早稻田大學早大群馬縣人會と遠藤博士の多祥を三唱して、和氣霽々の裡に散會した。時に午後七時。擱筆に際し、當日精神的及物質的に甚大なる御援助を賜はつた博士及博士夫人に對し感謝の微意を表す。因に本年度幹事に選任せるは、淺見登郎(政)飯塚鑛作(法)小川信太郎(商)小島敬七郎(商)竹内榮次(理)笛木實(理)の六氏なり。(小川生報)

●大阪同政會報告 五月十二日(日曜)午後六時より日清生命支社にて第四十一回例會開

催。出席者二十餘名、高村利世君の開會辭に次で

最低賃銀論
我輩の野狐禪

小原 是馨君
中島松次郎君

の講演あり。各、一時間餘に亘り益する所多かりき。其より約三十分間茶を飲み菓子を喫しつ、雑談を交へたる後、討論問題「男女同權の可否」に就き討論す。討論者は武居秀一、中島松次郎、岡本由松、小原是馨、和田和一郎、國澤照光の諸君にして論戰甚だ盛なりき。十一時閉會せり。

運動

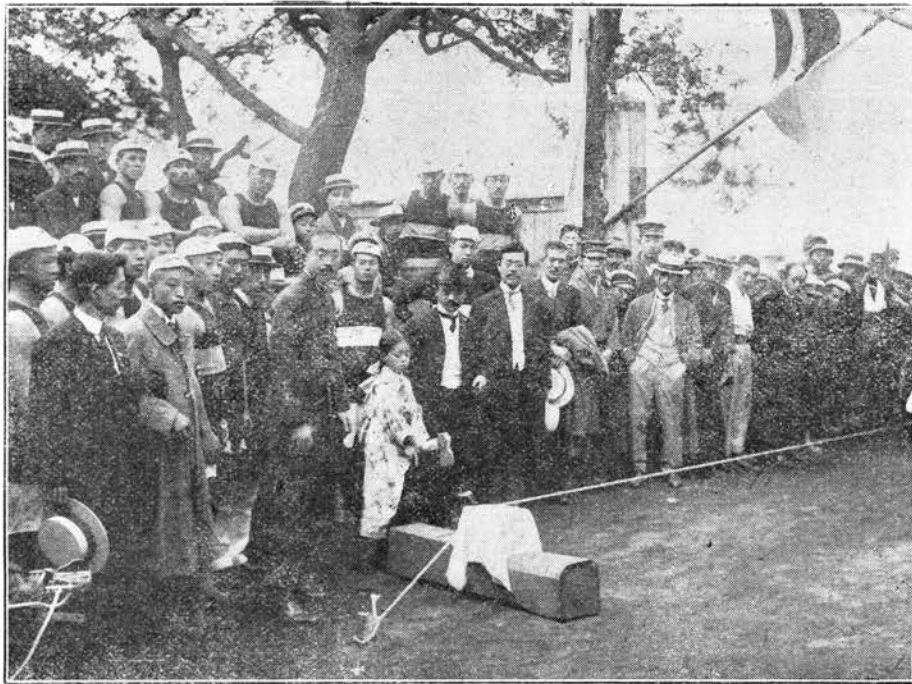
●端艇部

新艇進

水式

去る四月廿五日向

島墨田川造船所に新に競艇三隻を注文し破損艇の九隻の修繕を託してより約六十日の日數を経過したる六月二十三日漸く之れが進水式を舉行するに至りたり。



新艇進水式

此日式に先ちて修繕成りたる九隻の内競漕艇「天使」「惡魔」「超人」の三隻に選手分乘して八百松より競漕し拍手喝采の裡に決勝點に入りたり。一方式場たる造船所に於ては準備を

學校側より平沼、内ヶ崎、宮田、徳永の各理事、鹽澤部長、前田幹事土屋副幹事の諸氏參列せられ、艇友會諸氏、選手、部員及び造船所々員亦之れに列して式を開始せり。

端艇部會計主任の挨拶及び大體の報告に始まり、平沼理事の挨拶が済み、鹽澤部長の命名式に移り、競漕艇を正義、ろ號競漕艇を人道。は號競漕艇を威力と命名せられる。終つて艇友會を代表せる深澤氏の祝辭あり、次いで内ヶ崎理事命名せられたる新艇正義、人道、威力の前途を祝福せられたる即詠和歌の披露満場の喝采を博せり。

正義

大河の浪をつんざき勇しく

進むはさながら正義の劍

人道

濁りたる世に人道を示さんと

今新艇は水に入るべく

威力

數島の大和男子の威力の限り

堤の花をかざして漕がなむ

と見る新艇は斜面の船臺に安置され僅に一條の白紐を以て支へらる。杉浦技師呼笛を合圖に前教授坂本三郎氏令嬢律子嬢の銀斧一閃、白紐截断せらる、や拍手起り、汽笛鳴る。利那に折柄満潮の墨田川に瀟洒輕快なる新艇浮び出づ。斯くして「正義」「人道」「威力」の順序を以て盛會裡に艇の進水を終りたり。選手は直ちに試漕を始め新築艇庫見分に向はるる學校當局者及び艇友會のモーターボートを送り、共に艇庫に至り造船所に歸漕し、艇庫の見分を終りて造船所に歸着せられたる學校當局者と俱に造船所の饗應に預る。饗應の席上

所長の挨拶に次で平沼理事一同に代りて謝辭を述べられ、終つて一同早稲田大學及墨田造船所の萬歳を三唱して乾杯し、五時三十分目出度閉式。

因に新艇は去四月廿五日之れが建造を墨田川造船所に註文し、五月十四日起工式を行ひ、六月廿三日進水命名の式を舉ぐるに至りたる其間僅に四十日の短時日を以て竣工を見るに至りしものなりしが、建造の主要點を記すれば

- 全長 五十一呎
- 幅 二呎四吋
- 深さ 一呎
- 平均吃水 五吋
- 重量 七十八貫

型は前と同じくスライディングシートアウトリガーなれども其部分部分の點に於ては前艇に非常なる改良を加へ又缺を補ひ完成したるものにして、其の特長として注目す可き點は

- 外板 二重張
- 前後甲板 二重張
- 肋材 斜に着す

の三點にして未だ日本は勿論西洋に於ても競漕艇に使用したるを聴かず。之れ造船所及び端艇部員の非常なる研究の結果より生じたるものにして其の勢亦多とすべきなり。

雜報

●新任支那留學生監督江庸氏の大隈總長訪問
新に支那留學生監督に任ぜられ大隈總長に直屬の地位に立ち、我邦に着任せる江庸氏は、本大學高等師範部法制科の出身にして、業卒

へ歸朝の後、大理院長及び司法總長(我が大審院長及司法大臣に歴任せり。今回新任の披露と今後の訓戒とを仰ぐべく六月二十三日午前十時本大學教授青柳篤恒氏と同行して恩師大隈總長を早稲田邸に訪問せり。校門を出て正に十年、其間青雲の志成り、一國國務大臣に

進進したるは、過般來朝の林長民氏(本大學政治科出身)と二人のみなるを以て、大隈老侯の喜悅限りなく、其新たなる大任に就て將來の事共何呉れとなくいと懇ろに訓戒せられ、江庸氏の低頭して熱心に其教を聽ける有様、兒の慈父に待するが如くなりき。斯くて江氏は再會を約して青柳教授と同車して辭し去れり。當日は日曜日なりしを以て日を改め母校

十年間の發達を參觀せんとすと云へり。
●江庸監督の來校 前項記載の如く先きに大隈總長邸を訪問せられたる支那留學生監督江庸氏は、六月廿九日再び同邸を訪はれ歸途本大學に來訪、平沼理事を始め他の理事維持員と會談數刻辭去せられたり。

●内ヶ崎理事の講演 理事内ヶ崎作三郎氏は四月二十八日茨城縣稻敷郡八重村泉矯風會の聘に應じ、午後六時同會主催の講演會に臨み「性命の源泉に就て」と題し一時間餘に互る講演ありたるが、該講演會は同地校友菊池仙之助氏及其令兄幹旋の下に開催せられたる者なるに依り、内ヶ崎理事は往復共に龍ヶ崎町なる菊池邸に於いて丁重な款待を享けられたりとて、其の厚意を感謝し居られたり。

四月二十二日横濱貿易新聞主催の横濱紀念公會堂に於ける神奈川縣下各中學校、商業學校、農學校選手の學生演說大會に臨み、學生及父

兄約千五百人に對し「新教育の理想」に就て一時間餘に互る講演あり。後ち、同地公園内俱樂部に於いて貿易新聞社長三宅磐氏に招かれ、各學校長及學生選手と共に晚餐の饗を受け、席上三宅社長の囑に依り、各選手の演說を詳評せられたり。

六日二日深川區東川小學校に於ける深川區教育會講演會に臨み、區の有志者、教育家及労働者約三百名に對し「民衆の特權及義務」の題下に午後三時半より五時に互る講演あり。同十六日午後一時半より高崎市教育會總會講演會の爲に「日本國民の精神的動員」の題下に講演ありたるが聽衆約一千名。盛會なりき。

●川中教授の講演 教授法學博士田中穗積氏は六月廿三日群馬縣桐生町青年有力者より成る淡交會の聘に應じ、同町織物同業組合集會所に於いて午後二時より「戦後の經濟」と題し約二時間に互る講演ありたるが、聽衆四百名餘何れ、熱心に聽取せりといふ。

●北澤教授の講演 教授北澤新次郎氏は六月四日午後二時慶應義塾大學に於ける慶應義塾理財學會に於いて「米國黑人種の現在及將來」の題下に講演し、又同八日午後八時友愛會に於ける社會問題研究會例會にて「最近の勞動運動」と題せる講演ありたり。

●信夫講師の海外視察 講師信夫淳平氏は南米其の他視察の爲め五月三十日午前十一時東京驛發渡航の途に就かれたり。

●鶴田講師の逝去 舊講師理學博士鶴田賢治氏病氣療養中の處六月十日遂に逝去せられ、同十三日午前十時東京巢鴨庚申塚盛雲寺に於て葬儀執行せられたるが、本大學よりは

平沼、内ヶ崎兩理事、氏家教授、前田幹事諸氏會葬せられ理工科學生は靈前に弔辭を朗讀せり。

「吉田東伍獎學資金」 應募芳名並其金額

(第二回)

- 芳賀 矢一殿 一金拾圓
- 黒板 勝美殿 一金拾圓
- 片山貞次郎殿 一金拾圓
- 萩野 由之殿 一金拾圓
- 川上浩二郎殿 一金拾圓
- 間島 與喜殿 一金拾圓
- 内藤 久寛殿 一金拾圓
- 昆田文次郎殿 一金拾圓
- 石井 政吉殿 一金拾圓
- 中野 鐵平殿 一金拾圓
- 大江乙亥門殿 一金拾圓
- 星野 久殿 一金拾圓
- 原 達平殿 一金拾圓
- 目黒 甚七殿 一金拾圓
- 前島 密殿 一金拾圓
- 前島 彌殿 一金拾圓
- 大隈 信常殿 一金拾圓
- 平沼 淑郎殿 一金拾圓
- 徳永 重康殿 一金拾圓
- 内ヶ崎作三郎殿 一金拾圓
- 宮田 修殿 一金拾圓
- 坂本 三郎殿 一金拾圓
- 田中阿歌殿 一金拾圓
- 田尻稻次郎殿 一金拾圓

一金拾圓	井上友一殿	一金五圓
一金參拾圓	伊藤重治郎殿	一金五圓
一金五圓	服部文四郎殿	一金五圓
一金五拾圓	久米邦武殿	一金五圓
一金拾圓	遠藤隆吉殿	一金五圓
一金五圓	寛 克彦殿	一金五圓
一金拾圓	戸水寛人殿	一金五圓
一金拾圓	市村瓊次郎殿	一金拾圓
一金拾圓	桑木嚴翼殿	一金拾圓
一金五圓	馬田行啓殿	一金五圓
一金拾圓	堀田璋左右殿	一金拾圓
一金五圓	増田藤之助殿	一金拾圓
一金拾圓	小山温殿	一金五圓
一金五圓	田中不二殿	一金五圓
一金五圓	山口剛殿	一金五圓
一金五圓	楠山正雄殿	一金五圓
一金五圓	梅若誠太郎殿	一金貳拾五圓
一金五圓	矢口達殿	一金拾圓
一金拾五圓	松井等殿	一金壹百圓
一金五圓	杉田金之助殿	一金貳拾圓
一金五圓	杉山令吉殿	一金拾圓
一金五圓	會津八一殿	一金貳拾五圓
一金五圓	甲斐秀雄殿	一金九拾圓
一金五圓	中村康之助殿	一金壹百圓
一金五圓	大畑源一郎殿	一金五拾圓
一金拾圓	前田多藏殿	一金五拾圓
一金五圓	湯淺吉郎殿	一金壹百圓
一金五圓	中川竹太郎殿	一金貳百圓
一金拾圓	齋藏保次殿	一金參百圓
一金五圓	上領三郎殿	一金貳百圓
一金五圓	土屋操殿	一金壹百圓
一金拾圓	中川重政殿	一金五圓

菱沼幸平殿	渡邊八太郎殿	一金五圓
櫻庭達堂殿	齋藤義一殿	一金參拾圓
鈴木浩之殿	佐伯房次殿	一金五圓
百束於菟雄殿	淺野應輔殿	一金拾圓
江村正喜殿	田中穂積殿	一金五拾圓
中村元次郎殿	中島半次郎殿	一金貳拾圓
谷撤六殿	竹内明太郎殿	一金五拾圓
高信孝治殿	柳澤銀藏殿	一金五圓
佐藤辰衛殿	小田島彦太郎殿	一金五圓
野村良太郎殿	東恩納寛淳殿	一金五圓
加藤泰治郎殿	廣瀬貞一郎殿	一金拾圓
齋藤忠四郎殿	森田最中殿	一金拾圓
内山熊八郎殿		
小久江成一殿		
種村宗八殿		
高田俊雄殿		
徳川頼倫殿		
小松林藏殿		
田中四郎左衛門殿		
高山圭三殿		
原澄治殿		
上原鹿造殿		
松平頼壽殿		
澁澤榮一殿		
中野武營殿		
岡部菊太郎殿		
中村房次郎殿		
増田増藏殿		
原富太郎殿		
茂木惣兵衛殿		
渡邊文七殿		
星野錫殿		

合計金參千壹百六拾五圓也(壹百口)
 累計金五千貳百參拾七圓也 (貳百口)

右廣告仕り候也

「吉田東伍獎學資金」

實行委員

因に此他の申込者氏名は都合により次號に譲る事とせり(記者申す)。

●故角谷啓三君の碑文成る 昨秋十月の大暴雨に際して非命を遂けたる高等豫科生角谷啓三君のために講師學生有志より募金して之をその遺族に贈呈したるは當時の學報紙上に於て報告せし所なり。然るに遺族はこの金にて紀念碑を設立せんとして之を小生に依頼し來れり。依つて小生は教授菊地三九郎氏に撰文を囑托したり。今成るに及び之を録して寄附者諸君に報告す。菊地教授は和歌山縣の出身なれば遺族は同教授の撰文並に書を得たることを殊に感謝すべし。(内々崎作三郎藏す)

君爲和歌山縣湯淺町角谷啓三第三子才秀學優經耐久中學入早稻田大學大正六年十月朔遭暴風雨寓舍倒塌遂隕其命齡僅廿歲法諡信啓師友痛惜之銘曰

南山一角儼然雙碑天命雖短聲譽長馳
 大正七年四月早稻田大學學生講師有志建石
 菊地三九郎撰並書

正誤

前號二十二頁三段二十八行目「柿村字作君」とあるは「柿沼字作君」の誤りにつき茲に訂正す。

本號記事輻輳に付「雜報」欄の一部及「通信」欄全部を次號に廻はすの止むなきに至れり讀書及執筆諸君の諒恕を請ふ

大正七年七月十日印刷
 大正七年七月十日發行

東京市牛込區白銀町二十九番地三十五號
 編輯兼發行人 前田多藏

印刷者 東京市牛込區櫻町七番地 渡邊八太郎
 印刷所 東京市牛込區櫻町七番地 日清印刷株式會社

府下豐多摩郡戶塚町字下戸六六百四十七番地
 早稻田大學
 發行所 早稻田大學校友會

稟告校友各位

拜啓炎暑之候益御清榮奉慶賀候 陳者豫て
 往復端書を以て得貴意候 總長大隈侯爵紀
 念品贈呈資金の儀其後引續き御申込を得
 候段御同様な懷至極に存上候 就ては未だ
 御申込無之向は締切期日も切迫仕候に付
 何卒奮て御賛同被成下折返し御申込願上
 度茲に重ねて御依頼迄以誌上得貴意候

敬具

追て御参考旁是迄に御申込一部分校友會報
 欄へ掲載致置候間御一覽被下度候

大正七年七月

總長大隈侯爵

紀念品贈呈實行委員

法學博士 平沼淑郎 伯爵 松平賴壽
 渡邊 亨 永井一孝
 森 盛一郎

校友各位

大正七年七月十日(毎月一回十日發行)

好機！好機！

クレーヴネットレーンコート(晴雨兩用)(英國製防水保證附)

●オーヴア 金二十五圓半

●ト ン ビ 金二十九圓半

●リンネル背廣(折襟及ツメ襟) 金九圓五十錢ヨリ
 金十三圓マデ

●御婦人室内着(半麻白) 金四圓五十錢ヨリ
 金七圓位マデ

●最新流行小兒服(半麻) 金三圓五十錢ヨリ
 金十二圓位マデ

優良品ヲ最低價ニ御着用ノ方ハ先ツ

當店ノ製品ヲ

疑問ト躊躇

此ノ答ニテ去ル
 材料ノ直輸 技術者ノ長キ經驗
 飾ラザル組織 店員ノ奮勉

東京デパート

東京神田神保町角(電本三二四二)

校友 主任 佐藤新藏

(地方在住ノ方ノ御便宜ノ爲見本及寸法書速呈御注文ニ應ジ申候)